

33

538

竹老坪井伊助翁序
林學士安藤時雄著

日本林經濟論

東京 雙書館發行

序文

古今竹ノ論說少ナカラズ然レドモ大旨風流ヲ主トシテ未ダ嘗テ之
レヲ經濟的ニ論及セルモノ極メテ些々たり吁夫レ竹ノ用途多キ洽
ク人ノ知ル所ニシテ子猷ガ所謂一日モ此君ナカル可ラザルモノナ
リ蓋シ社會ニ用アルモノハ必ズ價アリ已ニ用アリ價アル以上ハ其
經濟ヲ論究シテ以テ之レガ盛大ヲ圖ルベキハ亦是厚生利用ノ一端
ト謂フベシ不肖伊助夙ニ此ニ見ルアリ古來風流的ノ空論ニ縁ラズ
シテ實着實地ニ栽培扶植ヲ試ミ西ニ東ニ有ラン限リノ種類ニ就キ
毎地方ノ寒温沃瘠培養施肥ノ方法及ビ其使用販路ノ如何ヲ踏査
研覈ノ末又之レヲ我地ニ移シ事ニ此ニ從フヲ殆ド二十有六年今ヤ
老ス庶幾クハ同志ヲ得テ以テ繼グ所アラントテ願フニ京都府下就
中山城國ノ如キハ從來竹林培養大ニ他ニ過ギタル所アリ此ニ於テ

乎行季飄然現知府大森閣下ニ謁シ衷ヲ具シ先以テ余ガ種竹ノ後アルヲ得タリ恰好シ既ニ林學士安藤時雄君在府日本竹林經濟論ノ著成リ序ヲ余ニ徵ス余ガ不文固ヨリ能ハズト雖ドモ余ガ嘗テ望ム所ニシテ全ク實着論タルヲ喜ビ自ラ辭スルコトヲ得ズ叨リニ所思ヲ叙シ以テ此論ノ世ニ行ハレンコトヲ期ス是豈啻余ガ望ノミナラシヤ天下竹林ノ望ム所ナリト云

明治三十九年五月

美濃之人 坪井伊助識

序

余性愛竹。自少壯研磨諸竹培養之方。頗有得焉者。蓋竹林稱東洋特産。而我邦竹種。冠東洋諸邦。獨若京都府葛野乙訓綴喜諸郡。則粹之粹者也。而其培養之方亦得宜矣。然則京都府者。我邦域中竹林之模範也。而若彼葛野諸郡。又爲府中竹林之模範者也。我邦晚近自交通歐米諸國。若竹材竹器。西人尤嗜之。到今其輸出頗盛也。今茲丙午歲三月。余發東京漫游京洛。及攝州有馬諸郡。觀察竹林栽培。及海外輸出之概。抵京都府農林學校。偶見安藤林學士。學士最用心於竹林。見其所著日本竹林經濟論者。乞余文以爲序。其書論述葛野諸郡竹林面積。及輸出等之統計。最爲詳悉焉。是無他。欲使京都府爲皇國全土竹林模範。而其海外之輸出益熾也。此可謂有益之書也。我邦古來論竹林培養者。絕尠矣。近世林農之學。日開月進。而若博士學士。專攷竹林栽培者。未嘗之有也。豈非握燈而不見火者也耶。安

藤學士。嚮出農科大學林科。爾來應京都府之聘。在農林學校。欲專攷竹林之事。以唱道振起斯業矣。而後來其洪益之波及他府縣者。果奈何也。余夙屢申主務省。極論竹林培養。不可附忽諸焉。且謂獎勵竹材之輸出。亦皆不見省矣。爲可憾也耳。岐阜縣有坪井氏者。老農也。夙攷竹林之樹藝。與余全其見矣。今又得安藤學士。後來斯業之勃興。可期而待也。嗚呼。余也老矣。獨期待安藤學士者。不爲少也。凡天下之事。當人々未言之日。獨言之最難矣。安藤學士殆其人也者歟。

丙午歲五月念三日

竹隱 春日 仲淵 撰

日本竹林經濟論自叙

東洋の植物にして之を歐米諸國に見る能はざる所のもの少からずと雖も其占領面積の擴大にして利用の廣く工藝上欠ぐ可らざるものは即ち竹なり。然かも世界に於て其名聲を獨占せるは本邦産の竹類となす而して其種類も亦甚だ多く南臺灣の熱帶より北は北海道の寒帯に至る迄絶ふることなく數十種の變種を以て算す。然りと雖も之等の内最も工藝的の利用に適し吾人生活上効用の大にして又欠ぐ可らず之が竹林として最も經濟的生産となし得るものは苦竹(眞竹)淡竹、黒竹、孟宗竹及び女竹の數種にして其他も亦特種の利用ありと雖も或は園藝的若くは盆栽的として人之を賞愛し經濟的に之を論ずるに足らず。尙ほ占領面積及び利用上最も重要視すべきは苦竹林となす。故に余は主として之に就き論述し其他三四種に付き論

及する所あらんとす、

思ふに竹林業は我國林業上其收利多く獨有の性質を有し經濟的關係又他の樹林業も赴を異にする所あるを悟り我國竹林事業の進歩せる京都附近の現狀を調査し以て其經濟的性質を明にし次で我國内外竹類の需要供給を經濟的に觀察し世界に稀有の林業を紹介せんと欲したるなり、

今や余輩は未曾有の戰後經營時代に遭遇し立國の大本を培養し國利民福を計らんが爲めに國民經濟の發達を土地生産業に待たんす然して此際我竹林業の進歩は竹利用上其生産費を低廉にし先づ内に充たし引いて外に張らんが爲めに輸出貿易を盛ならしむるの時運に向へり然るに從來未だ之が經濟的調査を公にせるものなく當局者又斯業に顧みるの由なかりき余は竹林業進歩の効果國家經濟

に及ぼす所著大ならずとするも我國特殊の林業并に其生産物の利用消費を經濟的に論究するを必要なりと信ず幸に江湖識者の注意を起すに足れば著者の光榮とする所なり、

明治三十九年五月十三日

洛西ノ寓居ニテ 安藤時雄謹識

例言

- 一、此の書は昨春余が農科大學の卒業論文に調査せる事項の一部分なり今京都府廳當局者及び世の有志者の好意により公けにするに至れるを光榮とす
- 一、本書稿成りて公けにせんとするに際し我國竹専門家坪井先生の叙を寄せられ著者感謝の至りに堪へざる所なり
- 一、今日に至り未だ其全からざる所多し只だ其一端を伺ふて他を推され示教せられん事を望む
- 一、本書は第一編に竹林業の經濟的性質を明にし竹林生産の特徴を明にし第二編に内外に於ける竹林産物の利用と消費に付事情を網羅す、
- 一、本書前編の根本的立論は恩師川瀬本多両林學博士の著書を參考

とする所淺からず茲に深く両恩師に感謝す、尙ほ後編に於て小出
林學博士の研究論文及び竹材輸出商長田大介氏の懇篤なる贊助
を得たるもの多く厚く其厚意を謝す、

一、本書は竹林事業に直接當れる者の外町村郡縣の地方行政者に注
意を促し斯業改良發達の指南車たらん事を希ふ、

一、本書は短時日に起稿し加ふるに行文拙劣意義貫徹せざるもの多
し之れ著者の遺憾とする所幸に讀者之を諒せられよ、

明治三十九年五月一日

洛西珍竹庵にて

著者再識

日本竹林經濟論目次

緒言

第壹編 竹林業ノ經濟的性質

第壹節 天然要素

第貳節 資本

其一 保險 其二 信用 其三 運轉力

第三節 小作入付

第四節 勞力

第五節 經營ノ範圍

第六節 企業

其一 竹林業ニ對スル企業ノ性質

其二 竹林業發達ノ狀態

第七節 竹林產物ノ運搬
第八節 收 利

二

第二編 竹林產物利用及ビ貿易

第一章 內地竹林產物利用

第一節 竹材ノ利用

其一 竹林ノ工藝的性質及ビ利用法

其二 竹材利用ノ變遷

第二節 本邦竹類需用額ノ一斑及ビ利用品ノ種類

第二章 竹材外國貿易ノ狀況

第一節 竹材ノ外國ニ輸出セラレタル沿革

第二節 明治二十九年前後外國ニ於ケル竹材商況

其一 米 國

其二 獨 逸

其三 佛 國

其四 英 國

第二節 外國向竹材ノ需要及ビ供給

第三節 外國向竹材ノ本邦ニ於ケル產地及ビ其種類品質

第四節 外國輸出ノ狀況

第五節 輸出竹材額ト内地伐竹額トノ關係

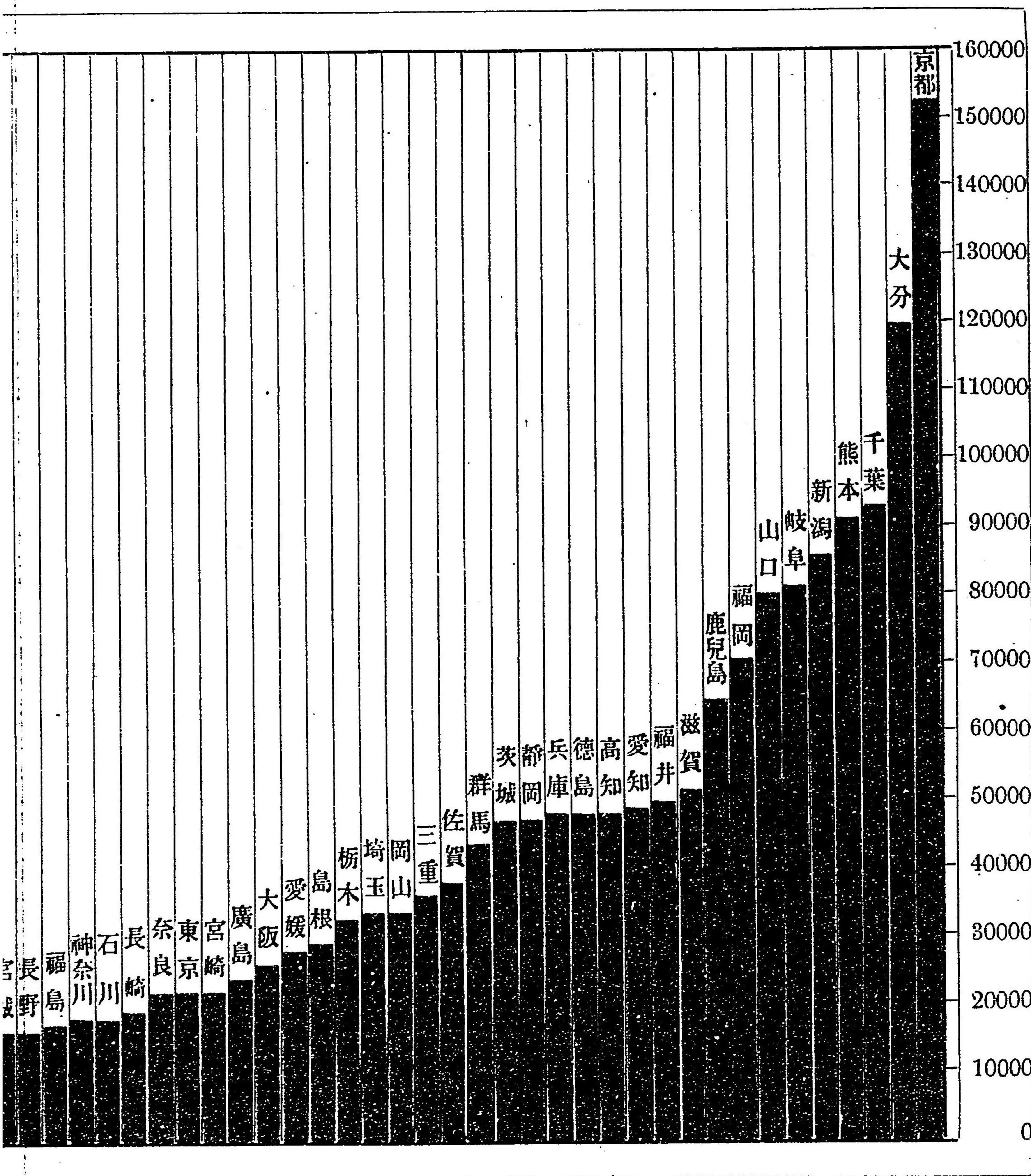
第三章 本邦竹材利用品ノ貿易狀況

第一節 竹器ノ貿易狀況

第二節 竹籠ノ貿易狀況

三

參府四拾二縣竹材採伐價額圖表(明治三十六年)



總計百七拾九萬四千四百拾圓

國有竹林	九、八二三圓
御料竹林	九、八二三圓
部分竹林	二、二二二圓
民有竹林	一、七八三、六五四圓

竹類別

若竹	一、三四八、四九九圓
淡竹	二、八九八、四九九圓
江竹	一、五八九、四九九圓
其他	一、〇五九、四九九圓

日本竹林經濟論 目次終

結論

附錄

- 第壹 內地產竹の種類及び其効用
- 第貳 臺灣產竹類及び臺灣人竹材利用
- 第參 日本竹製品類集

第三節 竹簾ノ貿易狀況

備考

附錄

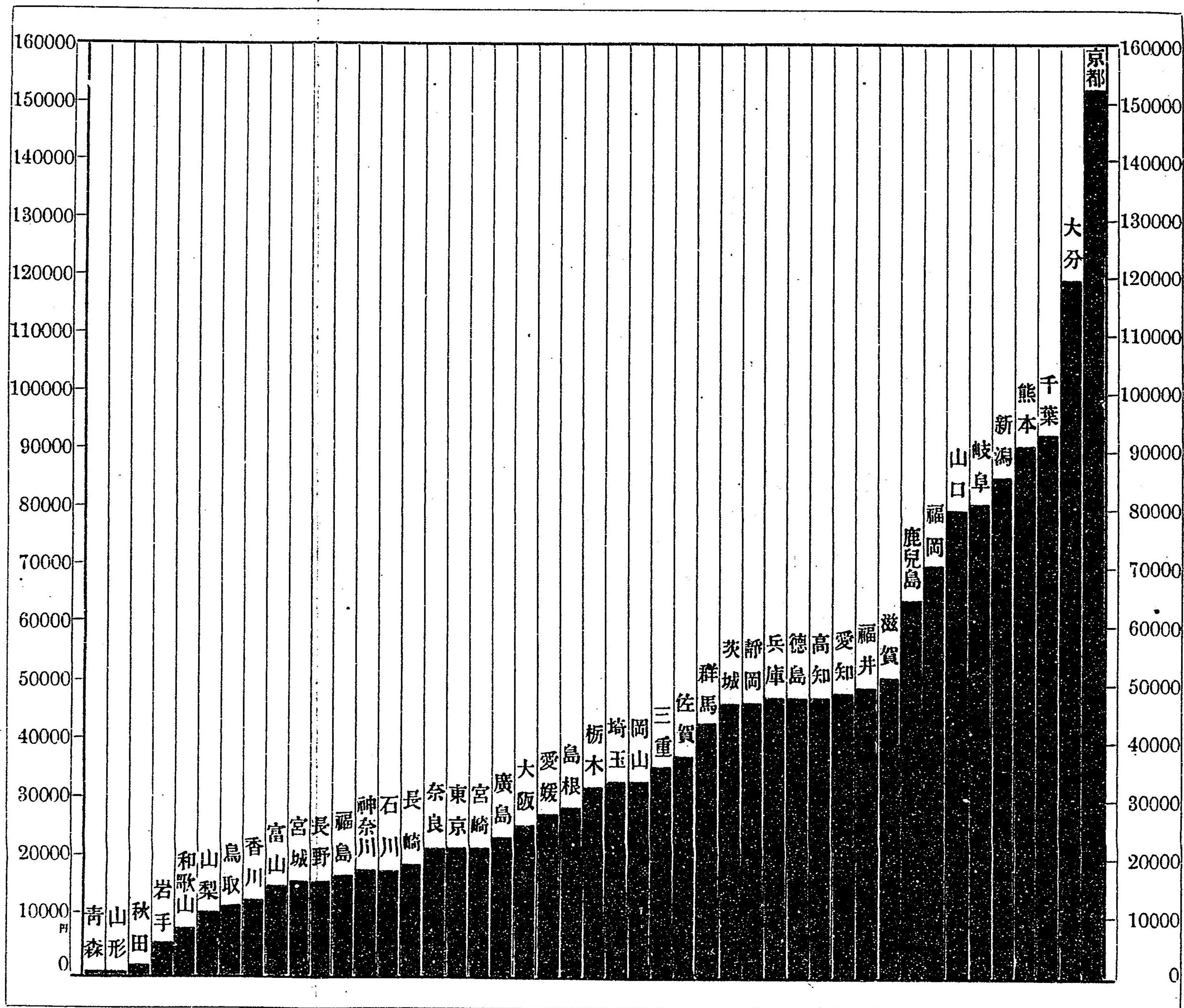
第壹 內地産竹の種類及び其効用

第貳 臺灣産竹類及び臺灣人竹材利用

第參 日本竹製品類集

日本竹林經濟論目次終

參府四拾二縣竹材採伐價額圖表(明治三十年六月統計表)



總計百七拾九萬四千四百拾圓

國有竹林 九、八三三圓
御料竹林 九、二一三圓
民有竹林 一、七八三、六五四圓

竹類別

若竹 一、三四八、四九九圓
淡竹 二、三九八、二二九圓
江竹 一、五八九、九二二圓
其 一、〇五五、〇六八圓

明治參拾九年四月一日

京都府立農林學校珍竹庵主人掲載

日本竹林經濟論



竹業ノ範圍ニ屬スト雖ドモ竹林獨有ノ性質及ビ施業ノ經濟關係ヨリモ異ナル所アリトス依テ竹林ノ經濟價值ヲ以テ其生産ヲ増進スルノ途ハ其事業ノ經濟的性質ヲ明クシテ必要トス

凡ソ純粹經濟學上及ビ土地生産論ヨリ之ヲ觀察スルモ其地若シ農作地ニ適シテ森林ヨリ利アレバ宜シク之ヲ農地トナスベク又樹林地ヨリ竹林地ニ供スル方益アリトセバ竹林業ヲ施スヲ可ナリトセシ、即チ其地若シ竹林ノ栽培ニ適シ又其地方需要ノ關係ニヨリ有利ナルモノトセバ農業及ビ他ノ林業ヲ施スノ必要ナシ、カノ竹ノ本場

ナリト稱セラル、京都府下特ニ山城諸郡ニ於テ之ヲ視ルニ近時茶樹及ビ桑樹ノ栽培ニ從事セルモノ其市場ノ不景氣ナルニ際シ此等ノ栽培ヲ廢シ開拓シテ顧ミズ之ニ代フルニ苦竹林及ビ孟宗竹ヲ植付ケタルガ如キ又東京府下荏原郡一帶ニ宗孟竹ヲ栽培セルガ如キ既ニ彼等地方民ノ腦裡ニ於テ竹林栽培ヲ以テ社會營利ノ目的トナシ又經濟的生產ノ要務ナリトスル如キハ企業ノ精神及ビ經濟上ノ思想廣ク產業界ニ浸潤シタルノ結果遂ニ又竹林業ノ進歩ヲ招クニ至レルヤ明ナリ

尙ホ從來九州地方特ニ大分縣宮崎縣及ビ山口縣等ニ於テ天然竹林ヲ亂伐シ愛惜スルノ念ナク宛カモカノ歐州ニ於ケル英人西班牙人ノ森林荒廢ニ有名ナリシニ類シ竹林ヲ不生産的ナリト考ヘ燒拂ヒタルガ如キモ未ダ竹林ノ經濟價值ヲ明ニセザリシガ爲ナリ然ルニ近

時漸ク交通ノ便開ケ竹林ノ利用進歩シ海外輸出品ノ重要物視セラ
ル、ニ至リテ却テ竹林ノ保護ニ傾キタルガ如キハ國民經濟上吾人
林業界ニ從事スルモノ、大ニ慶賀スベキモノト云フベシ、
抑モ利益アル事業ハ敢テ政府ノ干涉ヲ待タズシテ尙ホ其發達隆盛
ヲ期スルハ經濟學ノ原則ニシテ今日我暖帶ニ屬スル諸國ニ於テ著
シク竹林界ニ經濟原則ノ發展ヲ認ムルニ至ル又故アルベシ、今ヤ吾
人ハ竹林業ノ經濟關係ヲ論究スルノ必要ヲ悟リ然カモ樹林ノ經濟
的性質ヨリ異分子ノ含有スルモノ少カラズ特ニ此業ノ爲メ現狀ノ
事實ニ徴シ未ダ其究メザル所ヲ明ニセンコトヲ期ス、

第壹編 竹林業ノ經濟的性質

第一節 天然要素

凡ソ林業上天然要素ノ重ナルモノハ氣候位置土地ノ高低傾斜ノ度土質土壤等ナリ然リ而シテ竹林ノ生育上又一トシテ欠グ可ラズ然ルニ一般樹林業ハ農業ニ比シ此等天然要素ノ要求少ナキモ竹林ハ樹林ヨリ一層農業的生産ニ接近セルヲ以テ其要求農業ニ類ス之レ京都府下山城地方ノ實況然ル可キヲ証ス(但シ關西ノ天然的竹林ハ論外トス)

彼ノ氣候位置ニ就テハ竹林分布ノ實狀ニヨリ之ヲ察スルニ足ルベシ(我國竹林分布論ニ就テ述ブベシ)要ハ森林植物帶論ノ支配ヲ脱セザルモノナリ

次ニ土地ノ高低ニ於テ林業ハ農業ニ比スレバ力メテ高山及ビ氣候荒ク地味瘠セ耕作シ能ハザル如キ地ニ行フト雖ドモ本邦ノ有要竹種苦竹孟宗竹(淡竹)ハ決シテ然ラズ京都府下竹林業ノ盛大ナル地

方ニ於テ殊ニ其要求ノ大ナルヲ證明セリ即チ山岳ノ峰ヨリ山腹ニ向テハ主トシテ松林ノ占有地トナリ竹林ハ丘陵ニアラザレバ山麓或ハ田圃地宅地ヲモ占領シ肥料ヲ施與シテ人爲的地味ヲ作成シ盛土ヲナシテ土質土壤ノ更新改良ヲナスモノ多シ

次ニ竹林ト土地傾斜ノ關係ニ就テハ林業一般ノ性質ヲ具ヘヨク傾斜地ニ生育スト雖ドモ其生育狀態甚シキ急斜面ニ適セズ(但シ防岸地ノ場合ヲ除ク)經濟的生産ノ目的ヲ以テ竹林ヲ仕立テント欲セバ必ズヤ勾配二十五度以内ノ傾斜地タルベシ反之低濕ナル地ヲ好マズ又全体水平ナルヲ撰バズ排水ノ適セルヲ可トス殊ニ其方位ハ南或ハ南東ニ傾クヲ良トス北又ハ北西ノ傾斜地ハ水濕停滞上發育好良ナラズ更ニ之ヲ運搬利用ノ點ヨリ考フレバ他ノ木材運出ノ如ク修羅及ビ樺鐵索ノ裝置ヲ要セズ却テ樹林地ノ搬出便ナリトスル

點ハ竹材運出ノ利トスル所ニアラズ却テ損傷ヲ多クシ勞務ヲ多カラシム之レ山麓丘陵ニアラザレバ平地ヲ以テ經濟的價值アル所以トス、

尙ホ林業上森林ノ生育ニ向テ絶對的林地及ビ經濟的林地ノ別ヲナシ其價值ヲ論究スルノ必要アレドモ竹林ニ向テハ其目的私經濟的ナルヲ以テ必ズヤ經濟的林地ヲ要シ尙ホ農宅地ヲモ利アリトスルコトアリ、

終ニ其面積狹廣ノ得失ヲ論ゼバ一般林業ハ其特性トシテ可成的大面積ヲ要求スルモノナレドモ竹林ニアリテハ連續地ノ大ナルヲ要セズ之レ竹林ノ作業特ニ他ノ樹種ト異ナルノ致ス所ナリ何トナレバ竹林ハ其繁殖全ク根鞭ノ媒ニヨリ繁殖シ其地積一定ヲ占有セバ其範圍ニ於テ永年間ノ作業ヲ繼續シ利益ヲ得ルガ故ニ彼ノ樹林

業ノ如ク大規模ノ經營ヲ以テ利アリトナシ從テ保續的作業ノ爲メ大面積ヲ要求スルコトナキヲ以テ分合ノ必要少ナシ然レドモ所有面積ノ大ナル爲メニハ多數ノ範圍ニ別タル、ニ於テハ收益ノ多少ハ面積ノ大小ニ正比例シ只施業面積ノ樹林業ニ比シ小ナリト謂フニ過ギズ何トナレバ搬出利用并ニ手入上集約ナレバナリ、
某嘗テ曰ク、

「日本は維新後横に臺灣の土地を得たりと雖も縦に莫大の領有を失へり」ト嘆シ又

「血を以て横に領土を廣めんよりは寧ろ林業を盛んにして空間(縦)に領土を占領せよ」ト

之レ林業發達ノ必要ヲ促セルノ警語ナリ而シテ余ハ更ニ

「垂直的なると同時に水平的に莫大の領有を得んと欲せば竹

之レ即チ竹ノ生産力タル縦及ビ横ニ最モ迅速ニシテ地積ノ比較的僅小ニシテ收穫上及ビ栽培上多クノ資本ヲ要セズ土地生産上私人經營トシテ又容易ナルト純利ノ比較的大ナルトニ歸因スレバナリ

第二節 資本

竹林業ノ資本ハ又一般林業資本ニ異ナルナク立竹及ビ立地ノ二トナス、而シテ竹林ノ土地資本ニ對シテハカノ九州四國地方ノ天惠ノ竹林地ニ於テハ其交換價ハ地價ノ僅小ナルヲ以テ自ラ竹林業上重大ナル資本トナスニ足ラザレドモ尙ホ資本タルヲ免レズ況ンヤ京都府下其他竹林栽培ノ地方ニ於テハ其交換價格モ亦至大ナリ今之ヲ京都府下山城地方ノ實例ニ徵スルニ其地價一反歩ニ付上等ノモノ參拾五圓内外ヲ有シ劣等ノモノ尙ホ拾圓ニシテ平均拾數圓ナリ

トス尙ホ立竹付竹林地ノ賣買價ハ甚多額ニシテ優等一反歩數百圓ニ達スルアリ決シテ貳百圓ヲ下ラズト謂フ之レ竹林ノ資本ノ其運轉力ノ最モ速カナルモノニシテ收益ノ貨幣額ヲ以テ評價ノ標準トナシ得レバナリ又孟宗畑ノ地價ノ如キハ京都地方一反歩五拾圓内外ニ達セルヲ以テスルモ其資本價ノ大ナルヲ知ルニ足ル可シ、而シテ竹林地ニ存在セル立竹ハ之レ竹林業ノ蓄積ニ外ナラズ之ガ取扱ニ就テハ作業上隔年作業及ビ連年作業ノ二様ニ分ツテ得從來竹林ニ就テハ隔年作業ニ限ルモノナリト考ヘラレドモ晩近最モ進歩セル山城地方ノ周約的竹林業ニアリテハ又連年作業ヲ施行スルモノアリ且ツ竹林ハ主産物タル竹材ノ外副産物タル筍籜ノ收利毎歲アルヲ以テ連年收益ノ存スルモノナリ尙ホ連年伐竹スルモ其手入完全ニシテ地力ヲ衰退セシムルナク又過伐亂伐ノ件ハザルニ於

テハ更新スルノ必要ナクシテ不絶順環的の林業ヲ行フヲ得ベキナリ
近時漸之ガ勢力ヲ逞フセントス斯ノ如クニシテ完全ナル竹林ハ又
樹林ノ法正タルモノ、如ク固定資本ノ本性ヲ明ニ有セリ、
農業ハ毎歲種子ノ播下ト肥料ノ施與ニ多大ノ費用ト勞力トヲ要ス
ルモノニシテ始メテ收穫ノ多キヲ來タスモノナレドモ竹林ハ其初
期造林ノ時ニ當リ地拵後苗竹ヲ新植スルノミニシテ漸次自然ノ繁
殖力ニヨリ林相ヲ形成シ之ガ手入及ビ保護ノ費用モ僅少ニシテ又
樹林業ニ於ケルガ如ク永年間ノ利息ヲ考フルノ必要ナシ又之等資
本ノ恢復短時日ニシテ來ル之レ竹林業ノ經濟上價值アル所ニシテ
既ニ新植後十年ニ達セバ立竹ハ十倍以上ノ數ニ達シ又立竹ノ太サ
良好トナリ僅少ノ手入ニヨリ小面積ニ於テ無限ノ作業(天災ノナキ
限リ)ヲ繼續スルヲ得故ニ林業上尤モ短期收入ヲ目的トシテ經營セ

ラル、薪炭林ヲ萌芽更新法ニヨリ仕立ツルヨリモ更ニ經濟的ニシ
テ小民業ニ適應スルモノト謂フベシ、

「尙ホ茲ニ資本ノ性質トシテ經濟學上考フベキ三要素ニ付キ
附言セントス

(其二) 保 險

凡ソ林業ノ保險ハ林地ト林木トニ必要ナルモノナリト雖モ土地ハ
一般保險ノ性質ヲ有セズ唯ダ土地ニ産スル立木竹ノ保險ヲ要スル
ニ過ギズ然カモ現今林業ノ先進國タル獨逸ニ於テスラ林業上森林
勞働者ニ對スル保險ノ行ハルノミ即チ疾病保險死傷保險及ビ廢業
老年保險ナリトス、
斯ノ如クニシテ直接林業ノ主物タル林木ニ及バズ只稀レニ汽車沿
道ノ森林火災ニ就テ之有ルノミ未ダ本邦ノ林業ニ於テ保險制度ノ

時ニ林業勞動者ニ存スルモノ、外之ヲ見ズ、然リ而シテ竹林業ニ於テハ更ニ其勞動者ニ對スル危險ノ度極メテ之レ無キガ爲メニ保險ノ必要ヲ認メザルハ事業ノ簡易ナルニ歸スベシ、唯竹林ニ於テ危險ノ憂ハ瀛車沿道ノ竹林地ニ對シテ尤モ其必要アルガ如シ即チ京都府下山城ノ一帶瀛車四通八達宛カモ竹林ノ洞道ヲ通過スルノ感アリ而シテ竹林ハ火災ニ罹リ易キノ性質多キヲ以テ一朝誤テ失火センカ其損害又少カラザル可シ、然レドモ民家ノ近接スルアリ又竹林監督ノ周到ナルハ斯ノ如キ杞憂ヲ抱クノ必要ナシト謂フベシ、(本年四月上旬山城國木津近傍瀛車沿道苦竹林瀛車ノ燬ニヨリ四反歩ヲ全燒セシ例アリ)其他竹林業ノ著シキ被害ハ病害(自然枯)風害雪害等時ニ天災ノ不可抗力ニ依テ來タスコトナキニアラザレドモ多クハ其手入保護監督ノ如何ニヨリ且ツ竹林ハ其

面積廣大ナラザル爲メニ極メテ安全ナル生産資本ナリト云フベシ尤モ竹林ノ竊盜ハ孟宗畑及ビ其他竹林ニ於テ筭發生ノ當時往々其害ヲ生ズルモノナレドモ尙各自監督保護ノ如何ニヨリ防ギ得ルモノナリ(之等ノ事實ハ竹林周圍ノ新平民又ハ貧民窟ノ多キ地方ニ其例多シ)

只竹林業者ニ於テ最モ影響スルハ竹材ノ需要消費ニ伴フ商況ノ如何ニアリト謂フ可シ、故ニ京都府下竹林地方ノ如キハ常ニ之ガ市場ト連絡ヲ保ツニト必要ニシテ之ガ爲メニハ同業組合ノ設立既ニ存スルトセバ益々斯界ノ爲メ相謀リテ其道ニ忠實ナランコトヲ斯セザル可ラズ又近年竹林界ノ恐慌トセラる自然枯ノ被害ニ就テハ行政上適當ノ免租ヲ必要トス、

林業ノ信用ハ近世漸ク進歩シタリト雖モ尙ホ農業ノ信用ニ比シテ甚ダ微弱ナルヤ明カナリ元來信用ハ其擔保ノ種類ニヨリ二様ニ區別セラレ即チ第一對物信用(或ハ抵當信用)第二對人信用(或ハ人物信用)之レナリ、

而シテ農業ニ於テハ土地ハ其利用容易ニシテ生産物ヲ得ルコト速カナリ從テ生産信用ノ大ナルヲ以テ土地抵當銀行モ亦好シデ之ガ擔保ニ充ツ可ク又農業金融上最モ重要視セラレ、モノナリ然ルニ林業ハ之ニ反シ林業資本ノ主要ナル林木ハ危險ノ度多ク之等對物信用ノ極メテ低キヲ以テ歐洲林業國ニ於テ尙ホ林木ハ銀行抵當物ヨリ取去ラル、チ常トセリ只林主及ビ政府等ニ對スル一種ノ對人信用ハ行ハレ且ツ其林地ハ林木ヨリ信用高シトス、

然ルニ今ヤ京都府下竹林地ノ地價ノ如キハ他ノ山林地ニ比シ甚ダ

高價ナルモノナリ抑モ現今經濟ノ發展ハ既ニ人ト物トハ相對立スルニ原子ヲナサズシテ一ハ經濟ノ主体トナリ他ハ經濟ノ客體トナリ而カモ之等主体ト客體トノ關係ガ資本化シ動産化シテ考フルニ至リタレバ將來本邦各地竹林ノ改良發達ト共ニ其地價ヲ高メ京都地方ノ狀態ニ達セバ凡テ確乎タル資本ノ資格ヲ具備スルニ至ルコト明カナリ、

元來森林ノ素地ナルモノハ之ヲ林木備蓄ノ資本額ニ比スレバ極メテ微細ナル價格ニシテ殊ニ農地ノ如ク土地改良ノ資本ヲ投入セラレ、コト少ク又其生産力ハ之ヲ農地ニ比スレバ甚シキ永年間ノ後ニ非ザレバ效果ヲ收ムルコト能ハズ依テ假令林木ニ對スル生産信用アリトスルモ債權者ハ之ヲ重要視セズ爲メニ林地ノ信用ヲ利用シテ流動資本ヲ求ムルコト困難ナリトセリ、

然ルニ今之ヲ山城地方ノ竹林業ニ就テ觀察スルトキハ全ク其然ラザルヲ見ルナリ假令地目上竹林ハ山林ニ屬スト雖モ其作業ノ全ク農業的ナル肥料ヲ施スコト多ク又土地ヲ改良スル等支出ノ自ラ金錢借用ノ必要多ク從テ信用ヲ要スルコト大ナリ然リ而シテ土地抵當銀行ノ如キモ最モ有利ナル抵當物トシテ之ガ信用ヲナシ得ルモノトス何トナレバ京都的竹林業ノ如キハ殆ンド連年ニ營ミ且ツ其地價及ビ交換價格ノ田畑ニ讓ラザル標準價ヲ有スルヲ見ルモ明カナリ加フルニ立竹ノ蓄積ニ對スル生産力(運轉力)ハ極メテ安全ナル資本格ヲ有スルコト大ナレバナリ、

即チ之ヲ京都地方ノ竹林地ニ就テ見ルニ竹林ノ粗ニ過ギタルモノアレバ直チニ以テ其所有者ノ窮乏ナルヲ察シ又毎歲ノ伐竹量ニ就テ其過度ニ失スルトキハ斯ノ竹林所有者ハ借金ヲ來タセリト惡評

スルノ習慣アリ又如何ニ邸宅ノ壯大美觀ヲ裝フト雖モ未ダ竹林ヲ所有セザル者ニハ敢テ財産上ノ信用ナク之ヲ富豪家ナリト見做サルノ習慣アリ斯ノ如クニシテ之等ノ地方ニテハ竹林ハ財産家ヲ代表視スルノ標目トスト評スルモ過言ナラズ、

依之觀之モ如何ニ京都府下ニ於テ竹林ニ對シ對人信用及ビ對物信用ノ大ナルカヲ知ル可シ再言セバ竹林所有者ハ其備蓄ノ豐富ナルト交換價ノ高大ナルトニヨリ地方的信用ノ度高キヲ知ル斯ノ如キハ獨リ竹林業ノ獨占的性質ニシテ未ダ他ノ樹林業ニ多ク見ザルノ現象ナリトス、

(其三) 運 轉 力

凡ソ森林ハ一般ニ其運轉力乏シク又其山林賣却ニ於テモ地勢ノ不便ト面積ノ廣大ナルトヲ以テ常ニ購賣者少ク又其購買資本ヲ要ス

ルコト大ナリ故ニ小資本主ノ之ヲ購入スルモノナシ尙ホ又林業上ニ於テハ可成の大規模ノ經營ヲ利益アリトスルモノニシテ小面積ノ林業ハ完全ナル作業ヲ營ムヲ得ズ又其經濟的價值ナシトセリ從テ山林ノ賣買ハ小林業ノ外私人經濟ニテハ其實行今ヤ僅小トナルニ至レリ、

然ルニ我竹林業ニ於テ殊ニ其發達セル京都府下ニ於テ之ヲ看レバ其所有ハ私有林ノ箇數尤モ多ク私人經營ノ主ナルヲ証セリ全國ニ於テモ私有林全竹林ノ九九プロセントヲ占ム而シテ其等ノ面積モ樹林地ニ比スレバ甚ダ小ナリ之レ畢竟竹林業ノ周約的ニシテ農業ニ類スルノ結果ニシテ殆ンド農業ト運轉力ニ於テ相比肩ス可キ林業ナリト謂フ可シ、

カノ竹林地數付賣買價ノ一反步二百圓以上六百圓ノモノアルハ即

チ其運轉力ノ豐富ナルニ歸因ス可シ斯ノ如クニシテ京都府下竹林所有者ハ求メテ竹林地ノ購入擴張ニ務ムルト雖モ却テ之ヲ賣却ノルモノナキ有様ニシテ漸次畑地ノ竹林地(殊ニ苦竹林)ニ變更スルノ策ヲ施セリ斯ノ如ク京都地方ノ竹林所有者ニ對シテハ其財産中尤モ安全ナル資本又ハ財産トナシ竹林伐採物ノ賣却ヲ目的トナス外竹林ノ賣買關係ハ其所有主甚シク困窮シタル場合稀レニ見ル所ナリトス

第三節 小作入付

農業ニ於テハ小作入付最モ多ク又其本來ノ性質殊ニ日本ノ如キ周約的ナル所ニ適スルモノナリ然レドモ林業ニ於テハ其方法完全ナラザルノ外常ニ小作人自己ノ收益ニ之レ力メ爲メニ林地生産力ノ保存ニ注意ヲ施サズ終ニ其林地ヲ荒廢セシメ林地所有主ノ不利益

ヲ招クコト甚シトス故ニ一般林業ニ於テハ不適當ナルモノトセリ
 僅カニ日本林業ノ盛大進歩セル吉野林業ノ立木一代限ノ習慣ハ其
 小作的ノ性質ヲ帶ブルモノアレドモ尙ホ林業上多少小作入付ニ適
 セルモノトスルハ矮林作業又ハ森林副産物採收作業ノ如キモノア
 ルニ過ギズ
 然リ而シテ之レヲ我竹林業殊ニ京都府下栽培的竹林業ニ於テハ其
 性質上年月ヲ短カクシテ土地改良ヲ施シ能ク其利益ヲ受クベキモ
 決シテ之レヲ小作入付ニ附スルコトナクシテ土地所有者ハ自ラ竹
 林經營ヲナスニ當リ他ノ農作地ヲノミ小作入付ニ充ツルアルノミ
 之レ其收益ノ小作タラシムルヨリモ自己經營ノ方利益ノ大ナルト
 土地生産力ノ保護ニ於テ便益ナルトニヨレリ、
 然レドモ僅カニ孟宗竹林ノ筍採收ヲ目的トスルモノニ於テハ小作

付ノモノアリ而シテ其種類開墾跡地ノ小作ト數付小作ニ別ツト雖
 後者ハ自作地ニ對シ二分通リアルノミトス、

第四節 勞 力

林業ノ勞力ハ其作業ノ如何ニヨリ自ラ種々ノ別アリ而シテ竹林ノ
 作業ハ本邦ニ於テ自ラ二種ニ大別ス、

(1) 栽培的竹林業

(2) 天生的竹林業

前者ハ集約的ニシテ後者ハ粗放的ナリ而シテ自ラ又之レニ要スル
 勞力ハ異ニスルアリ後者ニ對スル勞力ハ殆ンド論スルニ足ラズ只
 伐採運搬アルノミ然ルニ栽培的竹林業ニ於テハ又以テ之ヲ論スル
 ナ興味アリトス、

元來生産事業ニ於テ勞力ハ生産要素ノ一トシ土地資本ト相並立ス

ベキモノナリ。然レドモ其勞力ヲ要スル最モ多キハ工業ニシテ農業之レニ次キ最モ少キヲ林業トス、
 今之ヲ林業ト農業トノ勞動量ニ就テ歐州諸國ノ先進國ニ於テ調査報告セルモノニヨルトキハ凡ソ農業ハ林業ニ比シ十八、九倍ノ勞働ヲ要スル比ニシテ大約二十倍ナリトシ或ハ十倍乃至十三倍ノ勞力ヲ有スルモノトセリ、
 今之レヲ竹ニ就テ其集約的栽培法ヲ行フ京都地方ニ於テ身体的勞働一反歩ニ付キ要スルモノヲ調ブルニ次ノ如シ、
 即チ孟宗筍栽培(一反歩ニ付一年間)ト有要竹林ノ栽培トニ就キ一年間ニ要スル勞力ノ比較ヲナサントス

- (一) 孟宗筍栽培ニ付一反歩ニ要スル勞働量ト勞銀
 × (勞働種類) (人 數) (勞 銀) (一反歩ノ純益)

× 手入除草	八二	女	六	貳圓七錢	
× 土 入	九一	男	二	參圓拾九錢	數圓
× 整理施肥	四二	男	六	1,60	
× 收 納	三三	男	六	4,30	
× 合 計	三三	女	六	1,116	2,48
(二) 竹林栽培ニ付					
勞働種類	人	數	勞 銀	一反歩ノ純益	
勞劬手	男	六	1,80	12,70	
淡竹	男	二	80	9,20	
茶竹	男	六	2,00	7,10	
墨竹	男	三	90	21,00	
以上	男	一	一日ノ勞銀參拾錢		
(女)	一	一日ノ勞銀拾八錢			

(京都府乙訓郡地方ノ調査)

斯ノ如クニシテ林業上最モ集約的ノ竹林ニ對スル勞銀ヲ農業勞銀ニ屬セル孟宗畑作業ニ比スレバ殆ンド一ト六乃至一ト一四ノ割合ナリ平均八倍ノ勞力ヲ要シ竹ニ對シテ一ハ農業的ナルニヨリ一ハ林業的ナルニ依リ自ラ勞働費ヲ異ニセリ、

而シテ其純收入ノ點ニ於テ却テ農業的ヨリモ林業的竹林ノ方五六倍ヲ有セリ近來益々孟宗畑ノ苦竹林ニ變更スルヲ見ルモ之レガ爲メナラン、

而シテ九州關西諸國ノ如ク天性的竹林ニアリテハ僅カニ勞働トシテハ伐採及ビ運材ノミナリトス、

前表ノ示ス所伐採勞働ナキハ買手ノ伐採セルモノトセルガ爲メ省ケルナリ然リ而シテ若シ伐採費ヲ受持ツト雖ドモ一反歩ニ付キ男一人一日四五十錢ノ費用ヲ要スルニ過ギザルナリ一般ニ竹林地近

在ノ熟練家ニシテ伐採ヲ専門トスル者ニ依ルベシ、

以上竹林業勞働ノ内身体的ノ勞力ニ就キ之レヲ述ベタルナリ今之レヲ經營スルニ當リ他ニ精神的勞働ヲ論セサルベカラズ、

凡ソ一般林業ノ經營ニ於テハ林主又ハ事業監督者ノ經營苦心スル所ノモノナレドモ竹林業其規模小ニシテ殆ンド栽培ヲ以テ事務トセルモノアリ故ニ其經營上林主ノ精神的勞働ハ極メテ僅カニシテ伐採量ヲ定ムルト其栽培手入ノ實行ニ就キ考ヘ尙ホ多少ノ保護業務ヲ必要トスルニ過ギザルナリカノ獨逸ノ林學泰斗しゆわっぱは氏等ノ調査セル農林二業精神的勞働ノ比ハ林業對農業ニ於テ一ト六トノ割合ナリト論シタルモ我國竹林業特ニ京都地方竹林ニ於ケルガ如ク農業的ナルニ於テハ其差多少ノ變異アルベキモノトス即チ竹林業ハ其面積ノ小ナルト連年收益ヲ占ムルノ故ヲ以テ之ガ

處分上ノ業務及ビ事業上用意周密ナラザル可ラズ然レドモ其業務ノ程度ハ誠ニ他森林經營ニ要スルモノト同一ノ論ニアラザルナリ又竹林業ニアリテハ林主ト労働者トハ密接ノ關係ヲ有セルモノニシテ小面積私有竹林ノ如キハ殆ンド精神的ト身体的トノ労働ヲ兼務セラル故ニ又多ク他ノ職業ノ副業タル性質ヲ備ヘリ然レドモ將來益々竹林業ノ發達進歩ヲ計ラント欲セバ林主又能ク其改良ニ力ヲ盡シ積極的生産ト消極的保護トヲ施シ之ニ要スル學理的精神作用ノ鋭敏ナランコトヲ要ス、

抑モ林業上勞力使用ノ程度ハ第一初期ノ粗放ナル方法ト第二農業的開發ノ周約ナル方法トノ別アリ、今之ヲ我竹林業ニ徵シ之ヲ觀ルニカノ九州四國等ノ天然竹林ハ前者ニ屬シ山城地方ノ栽培竹林ハ後者ニ屬スベキモノトス、カクテ山城地方ノ竹林業ハ歐州諸國ノ割

皮林又ハ製籃用柳林或ハ日本内地ノ桐又ハ樺林ニ於ケルガ如クニシテ猶ホ其利益比較上單位面積ニ於テハ優逸セルモノトス、又一般ニ林業ハ土地經濟上ニ於テ粗放的ノ性狀ヲ有スルモノニシテ農業ト自ラ異ル所アルヤ明カナリ何トナレバ林業ハ其植栽後生産ノ期間長年月ニ涉リ天然要素ヲ利用スルコト多クシテ歳々多數ノ勞力ヲ一定地域ニ要スルコト少ク僅カニ植栽ノ労働下刈間伐等ノ手入ヲ一定年度ニ施スニ止マリ施肥土地ノ改良及ビ耕耘ヲ施サザルモ既ニ間伐期及ビ伐期ニ達セバ著シキ收益アルモノトス、然ルニ山城地方ノ竹林業ハ全ク農業的ナルヲ以テ一般森林業ニ論ズル所ノ労働又ハ勤勞ヲ要求スル程度ヲ異ニス然レドモ其程度ハ又自ラ全然農業ノ如ク繁多ナラズ天然要素ノ恩澤ヲ利用シ又竹本來ノ發育力ニ依ルモノ多キハ論ヲ俟タズ此ノ如キモ其身体的勞力

ヲ用ウルニ於テ又便利ナル關係ヲ有ス即チ地方ニ於テ竹林業ニ使
用セル勞力ハ常ニ農業勞働者ヲ使用セリ而シテ每歲竹林業ニ於テ
要スル林内勞働ハ施肥下草ノ投與ニアレドモ之等ハ我農業上有用
ナル農作物栽培ノ閑暇ヲ以テ利用スルノ便アリ故ニ林主ハ廉直ニ
勞銀ヲ拂ヒ勞働者モ亦之ガ勞働ニ使用セラル、ヲ喜ブモノ、如シ
且伐竹ノ如キハ既ニ稻收穫後十月ヨリ冬季ニ涉ル農閑ノ期間ニ行
フヲ得ルヲ可トス、

且ツ林業勞働ニ於テ最トモ危険トスル伐木又ハ運材勞働ハ竹林業
ニ於テハ極メテ簡易ニシテ殊ニ山城地方ノ平地的竹林地ニアリテ
ハ尤モ其憂ヒ少ナシトス而シテ伐竹ハ林主或ハ買手ニ於テ之ヲ行
フモノナレドモ多クハ伐竹専門ノ人夫ヲ傭ヒ入ル、ヲ普通トス之
レ地方ニテ最モ熟練セル者ニ依頼スルヲ得策トス而シテ彼等人夫

ハ平地的竹林ニ於テハ一反步ヨリ一日四五駄伐採スルヲ普通トス
次ニ運竹ハ多ク竹商之ヲ受持ツモノニシテ伐採後一時林内ニ積載
シ漸次四五月ノ間迄ニ運搬ヲ終リ市場ニ着セシム、之ガ陸上運搬ハ
山城地方ニ用ヒラル、荷車ヲ便トヌ乃チ一荷凡ソ七八束ヲ積ミ之
ヲ河川ノ流域ニ送り茲ニ筏ヲ組ミ水運トナス例ハ山城國乙訓葛
野其他ノ諸郡ニテハ林地ヨリ桂川流域及ビ淀川流域ニ送り筏ヲ組
ミタル後大阪ニ輸送ス之ガ運搬人夫ハ凡ソ一乘五十束乃至百束ニ
シテ一人ニテ足り淀ノ竹問屋ヨリ大阪貯竹場ニ至ル八九里ノ水上
能ク半日ヲ要セザル程ナリトス斯クテ其地勢竹材運搬ニ適セル大
河ノ便アルニ於テハ竹林經營上又最トモ幸トスル所ナリ又海運ニ
於テハ帆船ヲ用ヒ幾百里ヲ航セシメバ運材賃極メテ輕減スルモノ
ナリカノ輸出竹林ノ山口大分其他ノ產地ヨリ神戸市ニ集ムルモノ

皆帆船ノ力ナリトス、上述ノ如クニシテ竹林業ハ身体的勞働ハ危険少ク勞働保險ヲ必要トスルコトナシ、次ニ精神的勞働中保護監督ノ業務ハ大面積ノ林地又ハ僻遠ノ森林地ノ如ク必要ナラズ山城諸郡ノ竹林ノ如キ最モ農地的ナルト一般竹林ノ隆盛トハ僅カニ筍窃盜之アル位ニシテ竹材ノ盜伐之レアルヲ聞カズ之其村落ニ近キト其生産物タルヤ筍數旬ニシテ母竹ノ大サニ達シ林産物ノ如ク多年ノ經過ヲ待タザル故ニ盜難損害ノ少キコト之レ竹林業者ノ最モ利便トスル處ナリ又竹林ニ於テハ一般ニ林業勞働者ノ如ク最モ工藝上ノ智識ニ有セズシテ可ナリ即チ僅カニ伐竹上ニ工藝上ノ知識ヲ要スルモ鋸(八九寸以上ノモノ)及ビ鉋(八寸以下ノモノ)ヲ用ユルノミニシテ今日文明ノ利器タル鋸器械ノ如キ之レヲ應用スルノ必要ナシ而シテ林主ハ伐採人夫ヲ雇ヒ入レバ

伐採者其器具ヲ持チ來ルモノニシテ其伐採術ハ只熟練ノ如何ニヨルノミ、斯クノ如ク竹林業ノ勞力ハ使用上ノ便宜最モ簡易良好ナルヲ以テ從テ竹林業ノ勞銀ハ少ク他ノモノニ比シ廉直ナリ大抵男一人一日三十錢内外ニ及ヒ女子ハ竹皮採收或ハ下草ノ施要除草ニ適スルヲ以テ之レヲ雇フトキハ一日僅カニ十五六錢ヨリ二十錢ニ達スルノミトス、以上凡テノ性質ニヨリテ之ヲ考フルトキハ竹林業ハ最モ民有林トシテ私人經營ニ適シ尙ホ交通最モ便利ナル土地ノ低クシテ高キニ失セズ河川ノ水便アル處ノ地ニ適ス乙訓郡葛野郡ノ竹林業ノ收利多キハ一ニ需要ノ關係アルト雖亦以テ農業者ニ多クノ使用上便アルト其私有林ナルトニヨレリ斯クシテ一般林業ニ於テ論スル處ノ

政府町村共有公共的ノ事業ニ適シ且ツ交通不便ナル僻遠ノ地ニ適セリト云フモノト反對セル所ナリトス假令僻遠ノ地ハ地價安直ナリト雖其收支差引却テ平均利益ノ大ナリトスレバ又何ゾ僻遠ノ地ニ竹林ヲ植栽スルノ必要アランヤ、
更ニ竹林業ニ於ケル勞働ノ分業ヲ考フルニ之レ又簡短ニシテ小面積ノ竹林所有者ハ殆ンド自己一人ニシテ之ヲ處置シ得ルモノニシテ較々大ナル所有者ハ勞働者ヲ雇フモ其分業タル毎歲極メテ變動少ク手入施肥ノ如キハ之ヲ兼ネ伐竹ノミ特別ノ人ヲ雇ヘバ可ナリ然シテ竹商ト竹林栽培家トノ分業明ナルハ甚ダ便利ナリ尙ホ竹材ハ木材ノ如ク之レガ造材ノ煩雜ナク直チニ全幹材ヲ以テ之レヲ販賣シ得ルノ利アリ其伐採者ヲ雇フル時ハ出來高拂トナスモノ多シ京都地方ニ於テハ大抵一束十二錢五厘位ニシテ雇人伐竹道具即チ

鉤鋸ヲ持チ來リ竹林伐採時期ニ當リ近接地ノ熟練家之ニ雇入レラル、モノナリ之レ竹ハ伐採ノ巧否ニヨリテ甚ク損失アルニヨレリ即チ立竹ヲ伐採スルニ當リ割裂セシメザルヲ必要トス又林業勞働ニ於テ下刈間伐植樹ノ如キモノ林地生産ノ收利ヲ増加スル上ニ於テ必要ナレドモ竹林ハ又特別ノ性質ヲ有セリ乃チ除草垣作又ハ土入ノ如キ或ハ日庸ナルアリ又ハ其數量ニヨルコトアリトス竹林新植ノ如キ勞力ハ其初期ニ於テ僅カニ親竹栽植及ビ土地開墾ノ勞力ヲ用ユ然ルトキハ竹ハ其固有ノ性質ニヨリ特別ニ人力ヲ用ヒサルモ繁殖速ニシテ短期間ニ保續的ノ竹林備蓄ヲ構成スルニ至ルモノナリカクノ如クニシテ竹林所有者ハ其面積ノ過大ナラザルト勞力ノ分業及ビ其量少キヲ以テ大林業ニ於ケル如ク受負事業ヲナサシムルコトナク多クハ臨時雇ニシテ常雇勞働者ヲ設クル必要ナシ

即チ京都府下ノ最小ナル竹林所有者ハ農業ノ閑ヲ以テ之レガ栽培手入ヲ營ムモノ多シトス、

第五節 經營ノ範圍

凡ソ事業經營ノ範圍ハ其大小ニヨリテ大經營ト小經營トニ區別スルヲ普通トス然リ而シテ此區別タルヤ其程度ノ一ハ大ニ一ハ小ナルニヨルモノニシテ性質上何等ノ異ル處ナシトス、
 一般ニ林業ハ其經營ヲナスニ農業其他ノ業ニ比スレバ極メテ大ナル面積ヲ要ス即チ小規模ノ林業ハ林業ノ特性ヲ應用スルニ當リ大規模經營ノ林業ニ及バザルモノトナス斯ノ如クシテ歐州諸國及ビ本邦ニ於テモ政府及ビ郡有組合所有林ノ如キ大規模ノ林業ヲ必要トナセリ尙民有ニ於テモ森林ノ面積ノ大ナルモノ少カラス我國吉野地方ノ大森林ハ民業ニシテ數千町步ヲ有スルモノ多シト云フ然

ルニ竹林ノ最モ盛大ナル山城國ニ於テ見ルモ其所有面積甚ダ小部分ニシテ百町步以上ニ及ブモノ稀ナリ多クハ數十町步ヲ有シテ尙大數主ナリト稱セル有様ニシテ其小ナルハ全ク農業上ノ畑地同様に細小ノモノ少カラズ之レ一般林業經營ノ原則ト反スル所ノモノアル所以ナリ茲ニ余ハ京都府下栽培的ノ竹林業ガ小經營小面積ヲ以テ尙ホ有利ナリトスル特色ヲ列舉セントス、

(1) 生産額

竹ノ生育ト繁殖ハ他林木ト異ナルモノニシテ小面積ニシテ其蓄積ヲ保續シ得ルト施業上要求スベキ範圍ニ比シ割合ニ少クシテ其生産多大ナリ、

(2) 資本額

竹林ノ資本ノ主ナル土地ハ山林地ニシテ地租安直親竹ノ新植費

用(面積單位ニ比シ)モ少クシテ土地ハ大ナルヲ要セズ從テ土地資本額ヲ要求スルコト大ナラズ、

(3) 市場トノ關係

竹ハ其產出地方ノ市場ニ向テ販路ヲ見ルコト多ク又確定セル需用者ニ向テ供給シ得ラル、ノ便アリ尙手工的利用ヲナスコトモ容易ナリ從テ市場ニ於テ停滯スルコト久シカラズ、

(4) 分業

竹林ニ對シテハ種々ノ分業著シカラズ大抵兼業的ノモノニテ足レリトス、

(5) 技術

他ノ林業ノ如ク複雑ナラズ簡短ナルコト殆ント畑栽培以上ナリ機械ヲ用ユルコト少ク僅カニ道具トシテ鉋鋸ヲ用ユルノ外鋏及

ビ鎌ヲ用ヒラル、ニ過ギズ尙運材ノ便アリ多クハ天然要素ノ支配ヲ受ケ良好ナル結果ヲ生ズ、

(6) 勞働者ノ數

竹林栽培ハ勞働ヲ要スルコト少ク從テ勞働者ヲ最モ集約的ノモノニ使用スル事他ノ事業ノ如ク多キヲ要セズ凡ソ一年間ニ總計男十人分一日費用ナル割合ニテ最モ充分ナリトス(一反歩ニ付)粗放的ノモノハ一年間ニ五六人分ノ日雇ニテ尙十圓餘ノ收益アリ家族的土地生産者ハ特別ニ人ヲ雇フヲ要セズ、

(7) 勞働者ノ地位

經營ノ指導者タル林主ト其身体的勞働者ノ間ニ於テ智識教育社會上ノ資格地位ヲ求ムルコト少ク極メテ通俗的ナリ故ニ勞働者ハ尙其竹林所有者ノ家族員ヲ以テ取扱ハレ家族的經營ニ適セリ

以上數ヶ條件ヲ具備セル特色ハ林業上最モ小規模ノ經營ヲナスニ足レリト云フベシ、

獨乙人 Bernharat 氏ハ連續セル林業ニ必要ナル面積ノ最小限界ヲ説キテ次ノ如クセリ、

(a) 二十年伐期ノ矮林ニ於テハ凡ソ一町三反步

(b) 六十年伐期ノ喬林ニ於テハ凡ソ六町四反步乃至七町七反步

(c) 百二十年伐期ノ喬林ニテハ十二町八反步ヨリ十五町四反步ナ

リト云フ、

カクテ竹林ノ伐期ヲ考フレハ大抵新植後林相一定セハ四年前ノモノヨリ毎歲一定ノ伐採量ヲ得ルモノナリトシ隔年ニ行フトキハ連年ノ凡ソ二倍ヲ要シ竹林施業ノ最小限ニ必要ナルハ凡ソ一反乃至二反トシテ足リ山城諸郡ニ於テ其民有竹林ノ最小ナルモノハ尙一

反步以下ナルモノナキニアラザレドモ之レ其竹林ノ地力保護及ビ竹林收益上ニ於テ經濟的タラザルモノアリトス

斯クノ如キハ竹林特有ノ現象ニシテ民有竹林ノ多ク又小面積ノ箇處多ク散布スル所以ナリ現今山城地方竹林所有者ハ可成的ニ其所
有面積ヲ増加シ企業利益ヲ大ナラシメントナ努メリ然レドモ其
小面積ニシテ尙收利アル竹林ハ小資本主ト雖尙ホ之ヲ賣却スルノ
愚ヲ見ズ從テ森林地ニ向テ主ニ苦竹林ノ新植及ビ茶園桑園等竹林
地ニ變更サレツ、アル所以ナリ斯クノ如ク現今竹林地ノ合一ハ多
ク必要ナルコト、ナリシト雖モ之レガ實行ハ困難ナリ殊ニ竹林ハ
農地又ハ山地ニ介在スルモノナルガ故ニ保護監督上甚シク僻遠ノ
地又ハ地勢不良ノ地方ヲ撰ブ可ラズ可成水運ノ便アリ土地稍高燥
ニシテ地味モ亦良好ナルヲ定メザルベカラズ彼ノ急斜地ニシテ峰

巒峽曲シ天空ニ巍々トシテ聳ヘタル深山ノ地方ニ於テハ經濟上又利益少キヤ明ナリ京都府下山城國乙訓郡葛野郡其他ノ諸郡ハ何レモ農地トシテ使用スルト雖モ尙可ナルノ地却テ竹林ノ爲メニ占領セラレツ、アリ宛モ茨城縣下笠原地方ノ松林及ビ相州南部ノ松林ニ於ケルガ如シ、

又竹林面積ノ整正セルモノハ稀ニシテ河川流域其他堤防ニ沿ヘル竹林地ハ常ニ流レニ沿フテ長キヲ見ル所ノモノナリ然レドモ又稍方正ナルモアリ元來竹ハ風害ノ被害大ナルヲ以テ其天然的保護ノ目的ヲ以テカク地方ニ於テ山地ノ麓ヨリ漸次山腹ニ及ボセルモノハ方正ニ近ツク其周圍ノ極メテ亂雜セル竹林ハ自然ニ皮燒ノ害其他風害ニカ、ル面積多キ理ナレバ強メテ一反歩以上可成方正主義ヲ採ルコト經濟上利益アルモノト云フベシ又竹林ノ收利ヲ目的ト

セバ竹林保護ノ爲メ周圍ニ林套保護樹ヲ植栽シ且ツ垣ヲ完全ニ設クルコト竹林地及ビ竹幹保護上必要ナリトス、

第六節 企業

(其一) 竹林業發達ノ狀態

凡ソ林業ノ發達ハ其初メ甚ダ幼稚ニシテ當時未ダ人智ノ發達セザルト人口ノ密ナラザルトハ僅ニ原生林ニ對シ一種採收ノ事業ニ止マリ天然ガ吾人ニ賦與セル自由物ヲ自由ニ收穫シ又其利用モ極メテ淺少ニシテ森林ノ如キ殆ンド經濟上ノ意味ヲ有セザリシモノナリ斯クノ如キ狀態ハ我竹林ニ對シテモ尙同様ノモノタリシナリ而シテ近來漸ク木材ノ價格ヲ有スルニ至リシモ竹材ノ價格ハ木材ニ比シ尙低ク往々農業ノ發展進步ノ妨碍物視セラレ濫伐或ハ燒拂ヲ行ハレシコト九州地方ニ其例ヲ見ル所ナリ宛モ獨乙諸國ニ往時行

ハレンシ焼畑作業ト好一對ヲナセリ)
 然ルニ世ノ進歩ト共ニ人口ノ増加人文ノ發達ハ宛モ木材ニ於ケル
 如ク竹林ニ對シテ其需用ハ驟々トシテ進ミ之レヲ深山ニ招クニ至
 リ供給上都市ニ接シタル所ハ既ニ早ク利用セラル、ニ至リタリ茲
 ニ於テ都市ニ接シタル所ハ竹材利用ノ需用ヲ充タサレシガ爲メ竹
 林ノ保護培養ノ道ヲ改良シ新植竹林地益々増加スルニ至レリ尙竹
 林ノ產物タル竹材ノ外籐筍ノ收益アルヲ以テ最モ畿内都會ノ附近
 ニテ方ニ發達セル所以之レヲ山城國諸郡ニ付キ考フル時ハ瞭然タ
 ル証據ト云フベシ、
 更ニ内地交通ノ開發セラレタル爲メ遠隔ノ竹林產物尙ホヨク需用
 地ニ送ラル、ニ至リ從來絶滅ニ汲々タリシ竹林モ今ヤ收益アル林
 業ト考ヘラル、ニ至リ又以テ往昔ノ思想ヲ一變セラル、ニ至リタ

ルコト之レヲ九州四國ノ竹林ニ見ルモ明ナリ、
 斯クノ如ク我竹林業ハ世ノ經濟事業ニ伴フノ域ニ達シ從來ノ如キ
 粗放的ノ方針ヲ行ハザルニ至リ林業上最モ進化セル栽培的林業ヲ
 竹林ニ見ルニ至ルハ驚クベキ現象ト云フベシ、

(其二) 竹林業ニ對スル企業ノ性質

凡ソ事業經營ヲ企テント欲セバ必ズ之ガ計畫即チ企業ノ方針目的
 トヲ有セザルベカラズ而シテ其方針タルヤ常ニ經濟的ニシテ其目
 的モ亦利益ノ最大ヲ希望スベキモノナリ、
 カクテ竹林業ニ對スル企業モ亦必ズ之ト其理ヲ同クスベキモノナ
 リ故ニ企業者ハ必ズ一般企業利益ノ法則ニ準シテ之ヲ企テザルベ
 カラズ殊ニ山城地方ノ如ク集約的ノ林業ニ於テ又同地方ハ其生産
 費ト生産收入トノ比較ヲ行ヒ經濟上生産業ノ進歩ト稱セラル生産

資本ヲ増加スルト同時ニ全收入ノ著シク増加セル方法ヲ企テザル可カラズ決シテ生産費ヲ投ズルコトナクシテ收益ノ比較的増加セザルモノ、如キ方法ハ企業者ノナスベキコトニアラザルナリ然レドモ若シ山城地方ノ栽培的竹林業ニ於テ土地ノ生産力ヲ考フルニ尙ホ極度ノ肥料ヲ施シ却テ收穫遞減法ニ從フガ如キハ決シテ企業者ノ利益ニアラズカノ未ダ竹林所有者ニ於テ企業心ナク收益ノ多カラザル地方ノ處ニ於テハ資本ト勞力ノ利用ヲ高ムルト共ニ收穫遞増スベキモノナルヤ明ナリ反之京都府下山城諸郡ノ如ク人口稠密ニシテ土地比較的狭キヲ以テ各人競フテ資本及ビ勞力ヲ竹林業ニ至ル迄投ズルコト充分ナルニ至リテハ能ク前後ヲ慎マズンバ却テ收穫遞減土地ノ不利益ヲ見ルコトアルベシ然レドモ竹林企業ハ最モ沃度及ビ位置ノ天然要素ニ支配ヲ被ルコト多大ナルヲ以テ國

ニヨリ處ニヨリ人爲ノ外收穫收利ニ多大ノ差ヲ生ズルヤ明ナリ故ニ竹林業ハ又一般林業計畫ノ要領ニ從ヒ常ニ生産費用ノ減少ヲ勉メ可成的天然力ヲ利用シ尙ホ吾人ノ技術進歩ト學理ノ應用或ハ積極的ニ或ハ消極的ノ作業ヲ施シ以テ勞働ト資本トノ低減ニヨリ價ノ大ナル產物收穫ヲ產出スルノ方針ヲ以テ竹林業ヲ發達セシメザルベカラズ故ニ竹林施業上ニ於テ經濟上有利ノ竹種及作業法及ビ伐期賣却法ヲ撰ビ地方經濟ニ伴ハシムルコト竹林企業ノ要務トナス、

竹林ハ其性質上造林費割合ニ少ク一定ノ地積ハ忽チ天然造林ノ性質ヲ帶ビ繁殖スルモノナレバカノ大面積ノ植林事業ノ如ク多額ノ造林費ヲ要セザルナリ即チ最モ安全ナル天然更新法ハ竹林業ニ優ルモノナシト云フベシ而シテ僅々數年ニシテヨク收益ヲ上ゲ更ニ

之ヲ連續シ得ルニ便アルコトハ小資本主ノ企業ニ適セルモノト云フベシ、

凡ソ企業ノ種類ハ事業經營ノ目的ノ方針ニヨリ區別セラレ、モノナリ而シテ其最モ普通ノモノヲ分類セバ

(一)個人企業 (單獨的)

(二)合同企業 (結社的)

ナリトス、

而シテ竹林業ハ果シテ何レニ適スルヤト云フニ一般林業ニ於テ論ゼラル、如ク組合會社又ハ企業者ノ聯合トラスト、リング、カルテル等ノ如キ數多ノ合同又ハ共有的ノ企業ニ適セズシテ最モ單純ナル一個人ノ企業ニ適シ法律上ノ一法人ナル政府又ハ町村共有ニ適セザルモノナリ即チ竹林所有ハ民業的ノモノナリトス然レドモ亦基

本財産ノ備蓄トナスニ足ル、

如何トナレバ竹林ノ資本タルヤ固定シ又安全ナルコトハ他ノ森林ニ見ザル所ニシテ現在ノ利益ト家族將來ノ安全ヲ圖ルニ易ク永年ヲ要スル林業ヨリモ林業上ノ智識少クシテ收利ヲ舉グルヲ得レバナリ、

然レドモ一般林業上小地主各其林地ヲ集メ之ニ安全ナル林業ヲ行ハンガ爲メニ組合林ヲ組織スルコトヲ利アリトスルガ如ク竹林ニ對シテモ亦最モ必要ヲ認メリ何トナレバ山城地方竹林業ノ最モ發達セル地方ニ於テ見ルモ小地主多クシテ自然完全ナル林業的施業ヲ行フ能ハズ其方法千差萬別タリ竹材商人ニ於テモ却テ竹商組合アリテ之カ購入ニ便益ヲ與ヘリ然ルニ竹林所有者ハ敢テ組合林ヲ組織シタルモノナシカクノ如キハ自ラ其林地ヨリノ收入ヲ舉グル

コト他ヨリ多キヲ得ルト自信スルモノナリト雖一般竹林業ノ完全
 合理ヲ欲セバ必ズ小面積ノ竹林所有者ハ此ニ合同シテ竹林業組
 合ヲ組織シ又政府ニアリテハ適當ノ保護ヲ與フベキコト必要ナリ
 然ラザレバ一私人ニ於テ其身上ノ事故ガ直チニ企業ノ盛衰ニ影響
 スルコト少カラズ市場ノ浮沈ニヨリテ大ナル恐慌ヲ招クコト少カ
 ラザルベシ
 而シテ組合ノ種類得失ヲ論ズルコト必要ナレドモ未ダ之ガ設立ナ
 キノ今日之ヲ論スル能ハズ而シテ此ガ設立ハ地方竹林業ノ盛否如
 何ニヨリ一定スル能ハザルナリ恩師川瀨教授ノ分類ヲ掲ゲテ其竹
 林企業者組合ノ性質中何レヲ良トスルベキカヲ記セントス、
 林業組合ノ種類ヲ別チテ
 (一) 林地ノ組合

(二) 林業ノ組合

(三) 監督上ノ組合

(四) 林業附隨事業ノ組合

(五) 林業上ノ公益ヲ目的トスル組合

以上ノ内竹林業ニ對シ之ヲ考フルニ山城諸郡ノ如ク竹林地甚ダ接
 近シ又密集セル地ニ於テハ林地ノ組合モ亦容易ニシテ宛モ森林ニ
 對スル町村林同様ニ思ハシムベキモノナリ、
 又各組合員ノ森林所有ヲ變更セザルトキ事業ノミノ共同タラシメ
 ント欲セバ林業ノ事業組合モ可ナリ斯クノ如キハ大規模ノ林業ニ
 類スルモノト云フベシ又監督上ノ組合及ビ竹林ノ公益ヲ目的トセ
 ル組合ノ如キ將來竹林業ノ發達ト共ニ必然起ラザルベカラザルナ
 リ近次淡竹林黒竹林ニ於ケル病害及ビ其他被害ノ程度往々著シキ

現象トナルニ至リタルニ於テハ或ハ被害豫防ニ對スル組合竹林產物組合竹林試驗組合竹林保護組合其他共同ノ利益ヲ目的トスル組合ノ設立ヲ要ス何ゾ農業ニ厚クシテ而カモ多大ノ利益ヲ地方經濟上ニ及ボスコト大ナル竹林ニ向テ冷淡ナルベキカヲ嘆セザル可カラズ

林業ノ先進國タル獨乙ニ於テ猶ホ政府勸メテ民有林ニ向テ組合林ノ必要ヲ獎勵セルヲ見ル蓋シ組合林ノ組織ノ完成セラル、キ組合ノ規定ニ從ハザルベカラズ故ニ自己ノ任意的行動ノ行フ能ハザレバ濫伐ノ弊及ヒ地力ノ荒廢ヲ免ル、コト少キノ利益存スレバナリ

第七節

竹林產物ノ運搬

竹林產物中直接生產物タルモノハ竹材ナリ次ニ副產物タルモノハ竹箨及ヒ箬或ハ枝材ナリ元來竹材ハ其性質木材ノ材幹ノ如ク容積

重大ナラズト雖モ其長サニ於テハ利用上却テ木材ヨリモ長キヲ要シ又長カラザルベカラザルモノトス而シテ其價格タルヤ割合ニ廉價タルヲ以テ其運搬力甚タ小ナリトス余茲ニ恩師本多教授ノ林產物運搬ニ付キ記サレタルモノヲ基礎トシテ我國竹林ノ運搬ノ狀況ヲ述ベントス、

即チ近時鐵道事業長足ノ進歩發達ハ運搬事業ノ開發ヲ促シカノ累退賃法ヲ設ケテ大ニ林產物搬出ノ便ヲ與ヘラレタリトシ彼ノ獨乙國ノ如キニ於テハ主トシテ汽車ノ便ヲ籍リテ運材ヲ行ヒ殊ニ又林產物搬出ノ目的ヲ以テ設置セラレタル森林停車場少カラズ茲ニ於テ木材市場價格モ畧ホ各地一定セリト稱セラル然ルニ我國ノ如キハ地勢峻難交通ノ機關未ダ全カラズ林業上ニ便益ヲ與フル所少ク文明ノ利器尙ホ林業上ニ利用セラレ運搬ヲ容易ナラシムルコト少

キ現状ナリ然リ而シテ我林産物中竹材ハ到底其長サト價格トニヨ
 リ考フルモ汽車運搬ノ利益ヲ被ル能ハズ未ダ全國何レノ停車場ヲ
 見ルモ女竹其他最モ短小ナル竹類ノ外良好長大ナル苦竹類ノ竹材
 ナ集積セラレタルコトナシ何トナレバ竹材ノ運搬ハ近距離ノモノ
 僅カニ荷車ヲ利用シ遠距離ノモノハ僅カニ水路ヲ利用シ竹筏又ハ
 帆船ニ積ムノ外他ニ良法ナシトシ輸出竹材ハ汽船ノ積載スル所ナ
 リトス

故ニ竹林ハ最モ河川流域ノ便益ヲ要求スルコト大ニシテ又其附近
 河川ノ便ニ伴ハザル可ラズ從テ河川流域ニ涉リテ竹林ヲ仕立ツル
 コトハ一ハ保岸ノ効ヲ奏スベキ國家經濟上ヨリ一ハ搬出ノ利アリ
 テ收利ヲ大ナラシム個人經濟上共ニ其當ヲ得タルモノトス
 然リ而シテ水路河川ヲ利用スル竹材運搬法ハ竹筏ナリ本邦ハ南北

ニ短距離ニシテ傾斜急ナルノ地河川多ク水運ノ便アリ然レドモ我
 國ハ農業上河川ノ灌溉水ニ使用セラル、所多大ナルヲ以テカノ初
 夏六七月ニ至リ既ニ河川ヲ堰キ水量ヲ減ズルヲ以テ竹筏ノ運搬モ
 其時季ヲ避ケ主ニ冬季ヨリ春季ニ涉リ伐竹後幹色ノ變ゼザルヲ期
 シ搬出スベキモノトス
 更ニ近年竹材運搬竹筏上大ニ不便ヲ感ズルニ至リシモノハ水源地
 ノ山林荒廢セルノ結果土砂河底ニ堆積シ水勢ヲ變シ河床高ク水深
 淺ク爲メニ多數ノ竹材ヲ筏ニ組ムコトヲ妨ゲ或ハ往々淺瀬ニ接シ
 テ竹材ヲ磨消シ價格ヲ減ズルノ事實少ナカラズ今之ヲ京都府下山
 城諸郡ニ見ルモ亦能ク之ヲ証セリ保津川ヨリ桂川ヲ經テ淀川ニ來
 リ伏見又ハ淀ニ至ルヤ更ニ大ナル竹筏ヲ組ミ以テ大阪ニ輸送スル
 ノ便アリ之レ其河川水量ノ豊富ナル爲メニ廉直ナル運材賃ヲ以テ

セラル之木材ノ價格運賃ニ左右セラル、ト同シク竹林經濟上又
以テ至大ノ關係ヲ及ボスモノ河川狀態ノ如何ニ因ルモノトス、
今此事實ヲ山城國淀川及ビ桂川ニヨリ大阪ニ搬出スル竹材運搬費
用ノ例ヲ揚ゲテ參考ニ供セントス、

「山城國乙訓郡新神足村ノ竹林地ヨリ大阪竹間屋ニ達スル間ノ
竹材運送賃一束ニ付平均拾錢ナリト云フ、今其順序ヲ記セバ該
竹林地ヨリ淀ノ竹間屋迄陸上荷車ニ積載セシム、乃チ荷車一荷
ニテ凡ソ二駄半(十束)重量約百貫ノモノ一里ヲ陸送シ淀ヨリ竹
筏ニテ淀川ノ水路八九里ノ間筏一乘大ナルモノ百束小ナルモ
ノ五十束ニシテ一人ノ運材夫能ク之ヲ運ヒ午前五時淀ヲ發シ
テ正午既ニ大阪造幣局前山城竹商組合借用貯竹場ニ達スト云
フ」

斯ノ如ク山城一帶ハ其運竹ノ便甚タ良好ナリ之レ多ク平地的林地
ナルト道路四通八達ノ便アルニヨレリ依之竹林地ノ賣却單價ト大
阪市場ノ單價ニ於テ大ナル差異ヲ見ズカノ我國木材ノ山元代價ト
市場價格ノ比一ト二十乃至一ト二十五トノ如キモノナシ例ヘハ「秩
父大瀧村ノ如キハ扁柏尺角二間物ノ立木拾錢内外ノ拂下ナルニ之
ヲ東京ニ輸送シ市場價格壹圓乃至貳圓五拾錢ノ運賃ヲ要スト云フ」
今竹材中苦竹ノ如ク長大ノモノニアラズ外國貿易用黒竹材長サ六
尺五寸ノモノニ付乙訓郡新神足村ニ於ケル山元代價ト神戸市場ト
ノ價格ヲ比較スルトキハ次表ノ如シ、

(黒竹ノ大サ) (本數) (山元單價) (神戸市場價格)

一寸	一本	四錢	五錢五厘
八―九分	一本	壹錢	貳錢

六―七分	一本	四厘	壹錢
五分	一本	貳厘五毛ヨリ參厘	四厘
五分以下	一本	壹厘半ヨリ貳厘	參厘

依之見之山元代價ハ市場價格ノ凡三倍ヲ超ユルコト稀ナリ又外國貿易竹材輸出向ノ竹材ハ大分山口高知其他ノ諸縣ヨリ海上帆船ノ積載運送スルノ利便アルヲ以テ比較的引合ウモノトセラル、尙ホ神戸市ヨリ精製セル竹材ノ歐米ニ輸送セラル、モノ亦海上幾多ノ波ヲ跋ツテ渡航スルモノニシテ其運賃ノ大要ハ神戸市長田氏ノ計算ニヨルモノヲ舉ゲテ參考トナサン、

竹材輸出積荷運賃表

(神戸港ヨリ達スル航路先)

(運賃)

ろんどん、まるせーる、

35S/-

あんとうゑるぶ、はーばる、
はんぶるぐ、あむすてるだむ、
ろつてるだむ

亞米利加大平洋沿岸

にゆーよーく (すえず通過)

(船舶ニ依ルモノ)

15/18 S 25S/- G87/-

(備考)積荷ハ一噸四十立方呎毎ノ割合ナリトス

尙外國運送ニハ蓆又繩鐵線ヲ以テ遠路航海ニ堪ヘシメ一方
損傷ヲ防グモノトス、

斯クテ竹材運搬ニ水路ノ便ナルコト竹林地設定上大ナル關係ヲ有
スルコト經濟上明ナリ故ニ竹林ヲ新植セント欲セバ常ニ運搬上殊

ニ水運ノ便否ヲ考慮シ始メテ竹林ノ増殖ヲ企テザル可ラズ、
 次ニ竹林業ノ副産物タル籐及ビ筍ハ共ニ汽車ノ便ヲ以テ廉價ニ且
 ツ敏速ニ之ヲ需要地ニ供給シ得ルモノニシテ其價格モ亦甚シキ差
 異ヲ見ズ尤モ筍ハ其消費上大都會附近ニ存スルニアラザレバ之ガ
 供給上不利ナリトス、カノ孟宗畑作業ノ都會附近ニ發達スル所以ナ
 リ、然レドモ竹林業トシテ經營セル苦竹淡竹孟宗竹林ハ筍ヲ目的ト
 スルニアラザレバ必シモ都市近接ノ便否ニ影響スルモノニアラズ
 籐ニ至リテハ之ガ搬出最モ輕便ニシテ人肩或ハ車便ヲ利用シ或ハ
 之ガ工作品トシテ輸送スルモ利益アルモノト云フベシ、

第八節 收 利

往昔經濟界ノ未ダ幼稚ナル時ニ當リテハ土地ノ生産物ハ主トシテ
 自足經濟ヲ以テ事足り其收穫物ハ自己生存上衣食住ノ料ニ供セラ

レタルニ止マリ廣ク之ガ購買者ヲ見出スノ必要ナカリキ然ルニ人
 文ノ發達ハ市場ノ開發ヲ促シ此ニ始メテ自足經濟ハ貨幣經濟ニ移
 レリ故ニ土地ノ生産物ハ社會ノ需要供給相互ノ關係ニヨリ彼我其
 利ヲ異ニシ其收益引テ地方經濟ノ變動ヲ招クニ至リタルヤ明カナ
 リ斯クテ今之ヲ竹林業ニ就テ伺フトキハ其主産物タルト副産物タ
 ルトヲ問ハズ之ガ利用ノ進歩ト需要消費ノ内外ニ増加セルトハ漸
 ク其收入利得ヲ大ナラシムルニ至レリ、

世人往々農業ハ林業ヨリモ利益甚大ナリト稱ス之レ農業ハ連年
 ノ收利アリ之ガ經營上粗收入ノ大ナルヲ以テナリ、然レドモ元來農
 林業ノ二者ハ各自特別ノ事情ヲ有シ土地經濟ノ關係上兩者ノ内其
 利益大ナルニ從フテ可ナリトス、然リ而シテ山城諸郡ノ如キハ關係
 的林地トシテ竹林ハ農業地域ヲ占領スル所少カラズ當地方ハ竹林

業ノ却テ農業ニ優ル利益アルヲ以テ自ラ奇異ノ現象ヲ呈セシムルモノニシテ竹林主産物タル竹材ハ其需要近畿ヲ主トシ遠ク北海道ニ及ビ用途内地のナルモ其量極メテ大ナルニ因ル而シテ今ヤ將ニ世界的經濟ノ潮流ハ我竹林界ニ及ボシ竹林産物及ビ之ガ利用品ハ外國貿易商ノ手ニヨリテ共ニ海外輸出品中ノ特産物トナリ茲ニ市場價格ノ盛況ヲ來タセリ今日市場ノ全權ハ商人ノ手ニ掌握セラレ凡テノ生産者ハ商人ニヨリテ立ツルモノナリト稱セラレ竹林業者ハ竹材利用者又ハ竹材貿易商ニヨリ其收益ヲ左右セラル、コト大ナリトス然ルニ竹林業者モ亦之ニ依テ自己ノ經營ヲ安全ニ且ツ利得アラシムルモノニシテ供給者ト需要者トノ關係離ル可ラザルコト我竹林界ニ於テ又顯著ナリトス更ニ之ヲ詳論センガ爲メニ我國既往ニ於ケル竹材價格ノ變動ヲ顧ミレバ明治三十一二年度ハ甚ダ

シク竹材需要ノ盛況ナリシガ爲メ其收利ノ竹林業者ニ及ボセルコト極點ナリキ然レドモ斯ル一時的暴利ハ久シカラズ將ニ現今一定ノ市場價格ニ減退セリ將來ハ其利用ノ尙ホ益々多カラシニハ甚シキ低落ヲ告ゲズ現狀維持ノ時代ヲ示スベシ元來竹林産物タル主トシテ社會并ニ國家ノ平和時代ニ於テ需要多ク從テ平和ノ際ニ於テ收利大ナリ何トナレバ其收穫物が農産物ノ如ク直クニ吾人生活上ノ必需品タラザレバナリ殊ニ輸出竹材ハ外人ノ嗜好ニ左右セラルルヲ以テ汲々嗜好ヲ損セシメザルコト緊要ナリ勿論竹林業ノ收利ハ其種類及ビ作業ノ集約ナルト粗放ナルトニヨリ概論スベカラズ主ニ栽培手入上進歩發達ノ如何ニ比例シ生産費用ト生産收入ノ差ニヨリテ定マルモノナリ尙ホ竹林業ハ樹林業ノ如ク輪伐期永カラズ新植後七八年ヨリ連年間伐的輪伐作業ヲ施シ

其利息永年ニ涉リテ計算ヲ要スルコトナク又其地方一般經濟關係ニ伴フテ差異アルモノトス

我國林業ノ粗收入ハ獨逸林業ニ比シ其收益殆ソド五十分ノ一ナリト稱セラレ然カモ獨逸林業ノ粗收入ヲ更ニ農業ニ比スルトキハ其種類ニヨリ甚シキ差アルコト我國ニ於テモ亦同様ナリ而シテ純收入ノ粗收入ニ對スル利益ノ割合ハ林業ハ遙カニ農業ニ超越セリト云フ今之ヲ京都都地方竹林業ノ收入ニ付キ當地地方ニテハ米作ニ優サル幾倍ナリト稱セラル、ヲ以テ見ルモ竹業純益ノ農業ニ比シ賞セラル、所ニシテ殊ニ經濟的竹林業ハ苦竹ヲ最良トス、今之ヲ實地ニ調査セル美林ニ於テ數字のニ説明セバ次ノ如シ

竹ノ種類	一反步收入	一反步支出	純益
苦竹	十八圓五十錢	五圓八十錢	十三圓七十錢

淡竹 林 十三圓二十錢 四圓二十錢 九圓

江南竹林 十五圓十錢 八圓 七圓十錢

尙ホ竹林業ノ收利并ニ經濟的價值ヲ一般樹林業ト比較シ其赴ヲ異ニスル所ヲ明カニセントス

(比較事項)

(樹林業)

(竹林業)

主副產物及ビ主伐間伐 主伐間伐ノ區別ナク連

收入アリ副產物ノ利益 年又ハ隔年ニ收入ヲ連

ハ割合少ク伐期ハ永シ 續シ且ツ副產物收入割

合多シ、

生産收入

木材ハ多ク造材ノ必要 竹材ハ造材ノ費用殆ソ

ヲ要ス、 ドナキカ又ハ僅少ナリ

肥料ヲ施スハ只苗圃ノ 栽培的竹林ニアリテハ

生産費用

ミニシテ山出後用ウル
コトナシ、
木材ハ重量大ナルヲ以
テ運搬装置完全ナラザ
ル可ラズ從テ大規模ナ
ルヲ要シ官業的ナリ

移植ノ當時ヨリ多量ヲ
歳々施ス、
竹材ハ運搬甚ダ輕便ニ
シテ費用少ク且ツ平地
的林業ニテハ特別ノ林
道ヲ要セズ從テ小規模
ニテ民業的ナリ

收額生長

林木ハ樹高生長ト体積
生長トハ年ト共ニ増加
シ主伐期迄價格生長昇
レリ

竹幹ハ一年ニテ高サト
体積ノ生長止マリ僅カ
數年ニテ品質價格ノ生
長定マル

斯クテ苦竹林ノ最モ集約的合理的ナル山城地方ニ於テ平均一反歩

ノ純益ヲ十圓トセバ一町歩連年百圓ノ歳入アリトス之ヲ我國杉林
ノ最モ完全ナル林業ニ於テ平均一町歩四十圓ヲ得ルモノトセバ其
比十ト四ニシテ苦竹林ハ單位面積ニ於テ二倍半ノ利益ヲ有スルモ
ノトス、故ニ京都地方ノ合理的苦竹林ハ獨乙ニ於テモ未ダ之ニ適中
ス可キモノナカルベク土地生産上并ニ經濟上自ラ竹林ノ擴張ヲ實
現シ宛アル所以ナリ、若シ此地方ノ經濟的性質ニ準シ一般我竹林栽
培地ノ改良進歩ヲ企ツルニ至ラバ之ニ國家ノ生産力ヲ大ニシテ更
ニ其利用消費ヲ盛況ニ導カバ實ニ我國ノ幸福ト謂フ可シ、

第貳編 竹林產物利用貿易編

第一章 內地竹林產物利用

第一節 竹林產物之利用及ビ利用ノ變遷

其一 竹材ノ工藝的性質及ビ利用法

竹林產物中最モ主ナルモノハ即チ竹材ナリ之レ内地諸般ノ工藝上及ビ美術上ニ使用セラル、ノミナラズ之ガ歐米諸外國ニ向テ輸出セラル、モノ多クシテ其需要ノ廣キ効用ノ大ナル決シテ木材ニ劣ラズ

抑モ竹材ハ木材ノ有セザル各種ノ特質ヲ有セリ即チ丈高クシテ幹圓ク直立シ中空處々ニ規則正シキ節アリテ隔室ヲナシ其幹一種長管ヲナシ其性質柔軟ニシテ彈力ニ富ミ彎曲シ易ク又分割力ニ富ミ

又薄片ニ剥ギ得ル等種々木材ノ有セザル性質ヲ帶ブルヲ以テ其利用從テ廣キ所以ナリ

竹材中苦竹淡竹孟宗竹ニ付キ先年竹材工藝的性質論ニ於テ林學博士小出氏之ガ復張、收縮、北重、彈性、及ビ分割性ヲ攻究シ木材ト異ル所ヲ明カニセラレタルモノアリ、今之ガ要領ヲ摘載スレバ次ノ如シトス

一、復張量ノ多小ヲ比較スレバ淡竹最小、苦竹之ニ次ギ、孟宗竹最大ナリ

二、竹材ノ收縮量ハ木材ノモノヨリ遙カニ小ナリ而シテ其收縮經過ノ模様ハ木材ニ於ケルト同シク含有水分蒸發シテ其量ヲ減シ空氣中ノ濕氣ト同一トナルヤ茲ニ收縮量ノ最大價ニ達シ爾後ハ空氣中濕氣ノ多少ニ伴ウテ常ニ其量ヲ増減ス

- 三、竹高ト收縮量トノ關係ニ就テハ竹幹ヲ上方ニ登ルニ從ヒ平均收縮量ハ漸次減少セリ
- 四、竹材ノ種類ニヨリ收縮量ノ多少ヲ示セバ淡竹ハ最小ニシテ苦竹ハ之ニ次ギ孟宗竹最大ナリ
- 五、竹材ノ比重ハ竹幹ヲ昇ルニ從ヒ増加シ又年齡ノ加ハルニ從ヒ比重ハ漸次増加ス
- 六、淡竹最大次デ苦竹ニシテ孟宗竹ハ最小トス
- 七、竹材ノ屈曲彈性ハ材料ノ種類年齡產地ノ異同含有水分ノ多少等幾多ノ原因ニヨリ異ナレリ
- 八、竹齡ノ増スニ從ヒ彈性モドール増加シ竹材ノ内皮部ヲ除去シタルモノト之ヲ存スルモノトハ其比苦竹ニテハ「 $1:3:1$ 」淡竹ニテハ「 $1:3:1$ 」ノ比ヲナセリ

又竹種ニ就テ平均上淡竹ノ彈性モドールハ苦竹ノモノヨリ稍大ナリ

九、竹材分割性ハ竹材施工上最モ利用廣大ナリトス今之ヲ總括シテ示セバ、

- A、分割力ハ竹片ノ厚サノ増加ニ伴ヒ漸々増加シ材片ノ厚サニ正比スルモノトス、
- B、分割力ハ竹片ノ長サノ増加スルニ從ヒ或限界迄ハ漸々増大スト雖其以上ハ差異殆ドテシ、
- C、分割力ト材片ノ幅トノ關係ハ或限界以上ハ幅サニ無干係ナル傾向アリ
- D、分割力ト分割方面トノ關係ハ觸線向分割力ハ半徑向ノモノヨリモ概シテ小粗ボ $1:1.25$ ノ比ニシテ木材ト趣ヲ異

ニセリ

E、分割力ト竹高トノ關係ハ竹幹ヲ昇ルニ從ヒ漸次減少ス

F、分割力ト竹種トノ關係ハ淡竹最小ニシテ苦竹之ニ次ギ孟

宗竹最大ナリ

G、竹材ト木材殊ニ針葉樹トヲ以テ其分割力ヲ比スレバ竹材ノ方一般ニ大ニシテ大約 10% 以上

小出林學博士ハ實驗上ヨリ以上竹材工藝的性質ヲ論ゼラル、然シテ古來其應用多年ノ實驗ニヨリ廣カリシ所以又疑フ可ラザルナリ
今本邦竹材ノ利用上ノ方法ヲ大別スレバ、

I、生材ノ儘全幹ニテ利用スルモノ、

II、生材ヲ切斷シ丸材ニテ利用スルモノ、

III、竹材ヲ分割シテ細工用ニナセルモノ、

IV、美術的應用法ヲ施シテ利用スルモノ、

尙之ヲ細別スレバ

A、油拔ノ法

B、鼈甲色ヲ附スル法

C、白色トナス法

D、擬煤竹ニナス法

E、藥燒ノ法

F、藥液ニテ模様ヲ附スルノ法

G、染竹トナス法

H、瓦斯燒ニテ模様ヲ附スル法

I、柔軟ニナスノ法

斯クノ如クシテ以上ノ方法ニヨリ現今我國竹材ノ利用ノ種類中主

ナルモノハ第二節ニ列擧スルモノノ如シ

其二 竹材利用ノ變遷

竹ハ元來東洋ノ特産ニシテ歐米諸國ニ之ヲ生ゼズ從テ東洋ノ舊國印度支那ニ於テ古來其利用ノ大ナルコト又疑フベカラズ即チ漢字ニ於テ竹冠ノ字ヲ檢スルニ其數一千餘ニ達スルヲ以テスルモ明ナリト云フベシ

歐人嘗テ曰ク「竹ノ利用ハ野蠻時代ノ人種ニ適スルモノナリ」ト氏ノ言多少東洋諸國竹林地ノ人種ヲ冷評スルノ甚シト雖ドモ亦以テ其眞理ヲ穿ツ所アリト謂フ可シ

元來自然ガ東洋ノ諸國ニ竹類ヲ分配シタルハ天惠ナリ其未ダ人文ノ發達セザル時ニ於テ天與ノ產物ヲ直接利用スルハ東西ヲ問ハズ歴史ノ証スル所明ナリ竹材利用上ノ性質前記ノ如ク大ナルヲ以テ

之ヲ使用スルハ自然ノ勢ナリトス

然ルニ人文漸ク開發シ吾人ハ天然界ニ存ズル凡テノ物質ヲ利用スルニ至リ始メテ吾人生活上必要ナル材料ヲ撰擇スルニ至レリ即チ近代ニ至リ木材ノ利用進歩シ更ニ銑銅亞鉛錫等ノ材料發明セラレ其保存期永キト加工ノ自在ナルトハ漸ク本邦竹材ノ利用界ヲ蹂躪スルニ至リタルヤ明カナリ

然レドモ我が國ハ未ダ鐵亞鉛等ノ鑛產物少ク之ガ利用上常ニ外國ノ供給ヲ仰ギツ、アルモノナリ故ニ從來竹材ヲ以テ利用セルモノ製鐵製亞鉛ノ板類又線類輸入セラル、ニ及ビ近年苦竹ノ桶輪用九寸周ヨリ尺以上ノ大材ヲ必要トスルコト少ナキニ及ビタリ又柳條萬年蛇籠及ビ亞鉛製萬年蛇籠ノ發明以來漸ク竹蛇籠其勢ヲ減シタルガ如ク尙ホ近年都會并ニ町村ノ家屋ニ於テモ亞鉛板及ビ鉄葉ノ

唐樋ヲ用ヒ又鉄柵ノ垣ヲ用ウルニ至リタルガ如キハ變遷ノ著シキ
 モノトス斯クノ如キハ決シテ國家經濟上ヨリ觀察スル時ハ年々多
 額ノ外資輸入ヲ仰グモノニシテ却テ内地天與ノ竹材ヲ避クルモノ
 ト云フベシ然レ共文明ノ潮流ハ上流社會ノ生活ニ著シク伴ヒ又之
 ナ制スル能ハザルニ至レリトス
 然リ而シテ我國全般ヨリ吾人ノ生活程度ヲ察スレバ未ダ全ク竹材
 ノ利用ヲ障碍スルモノニアラズ却テ又利用ノ他方ニ進歩スルニア
 リテ利用上決シテ竹材供給者ノ憂ウベキコトニ非ズ却テ將來其不
 足ナキヤヲ疑フモノナリ
 今本邦ニ於テ舊時利用サレタルモノニシテ現今勢力ノ著シク減退
 セラレタルモノヲ舉レバ凡ソ左ノ如シトス

目釘、竹槍、竹牌、竹流、竹繩、箸笠、竹紙、道中籠、竹弓

矢、其他、

(備考) 男山(山城國綴喜郡八幡)ノ竹材利用沿革、

男山ノ竹ト嵯峨ノ竹ト共ニ古來ヨリ近代ニ至リテモ其名高キモノナルガ今其沿
 革トシテ始メテ尊重セラレタル所以ヲ探ヌルニ

(1) 昔時當山ニ産シタル竹材ハ男山八幡宮ノ神威ニヨリ殊ニ武人ヲシテ尊敬ノ
 念ヲ強カラシメ自ラ利用ノ途ヲ廣クシタルコト

(2) 近時學理上其品質良好肉厚ク堅剛ナルヲ以テ利用上ノ價值ヲ認メタルコト
 其始メ源賴朝ノ時代ニ當山ヨリ産シタル竹材ヲ以テ彼ノ刀劍
 ノ目釘ニ多ク用ヒラレ次デ足利將軍室町時代益々其利用盛ニ
 シテ下テ又徳川時代各諸侯刀劍用目釘ニ向テ注文シ又此地産
 出ノ竹ヲ以テ弓トナシ賞セリ今ニ八幡ニ弓ノ名家致セルトテ
 弓塚ノ名存ズ今日ハ既ニ本來ノ武器製作者減少シタリ翻テ徳

川二代將軍秀忠(定寛元年)ニ至ル迄ハ獨リ武神ノ思澤ニヨリ吉事ナリトノ迷信的信仰ヨリ專ラ利用セラレタルモノナリト云フ次ニ三代將軍家光以降ニ至リ眞ニ當山苦竹材ノ良好ニシテ利用上効果ノ著ルシキヲ認メラレ益々其需要ヲ高メ其後近世ニ至リ更ニ文明ノ開發利用ノ進歩ニ伴ヒ電燈ノ炭素線ニ應用シテ嘉賞セラル、ニ至レリ而シテ之ニ用ウルモノ他地方ノ炭織竹材ニテハ成績不良ナリトシテ專ラ男山ノ竹材ハ嵯峨ノ竹ト共ニ其名聲ヲ歐米ニ傳ヘ年々之ガ爲メニ供給スル所大ナリトス

(備考) 京都市竹製茶器師黒田宗傳氏ノ解説

(沿革) 元祿時代黒田正玄氏近江國大津市ニ於テ創業ヲ爲シ其後京都市ヘ移轉シ經續斯業ヲ經營シテ十一代ノ多年ニ至リ明治二十二年二月押小路富小路角ヘ分家セルモノナリ、

(原料) ハ山城國産主トシテ嵯峨松尾地方ノ良材ヲ撰用ス

(製造法) ハ自宅ニテ製造シ之ニ用ウル竹材ハ竹發生後四ケ年以上經過シタルヲ伐採シ之ヲ百ケ日以上水分ノ去ル爲メ燥乾シ炭火ニテ竹ノ油ヲ焙リ取り六十日以上再ビ日光ニ曝シ色ヲ白クシタル後二ケ年以上經過シタル善良ノモノヲ撰シ製品ニ使用セリ然ラザレバ破レ又ハ腐蝕ヲ生シ狂ヒテ來サシムルノ憂アレバ此点ニ注意シ凡テ花生柄杓其他ノ竹器類ヲ作レルナリ斯ノ如クニシテ竹器(茶器類)ハ原料安價ナルモ日數ト手數又著シク多キヲ以テ廉直ナラザル所以ナリ、

(効用) 當店ノ製造セル竹製茶器ハ高尚ニシテ雅致アリ風流雅人ノ嗜好ニ適シ需用多ク製造法ニ述ベシガ如キ原料精撰シタル者ニシテ其製作上茶生ノ切口ヲ殊ニ鋸挽キノ儘爲セシハ注留水ノ溢レ

ヲ防ガン爲メ或ハ其切口ニテ小刀ノ吸收力ヲ保タシメントスル注意ニシテ上下切口ノ水平傾斜ナカラシメザルハ之又製作者多年ノ苦心効果ニシテ大ニ得色トスル所ナリ就中柄杓ノ製作ニ付テハ今其大要ヲ摘記スレバ其月形仕立ノ製品ハ彼家ノ祖先タル黒田正立ノ發明ニ係リ其製作ノ上ニ於テ非常ニ困難アルモノナリ其体裁ハ他ノ製品ニ比シ數等優逸ナルヲ得色トスル所ニシテ湯ノ洩レザル事ト「クルイ」ノ出ザルコト柄ノ脱ケザル事釜ニ掛ルモ轉倒セザル其重ナル效能ニシテ所謂當舖ノ家傳製作ニ屬シ傳授ヲ受ケザルモノ、到底爲ス能ハザル所ニシテ實際一度使用スレバ能ク之ヲ了解スルニ足レリ且又急須及ビ茶碗ノ如キハ熱湯ヲ入レ外ヨリ持ツモ燒物ノ如ク熱キ事ナク且ツ漏破スルコトナシ斯クテ夙ニ江湖諸彦ノ賞賛ヲ得日々販路擴張スルニ至リ其發達ノ上ニ於テ満足スル所

ナリト云フ斯テ黒田家製作ノ茶道竹器ハ内外各博覽會并ニ共進會ニ於テ既ニ屢名譽賞牌ヲ受領セリ現今黒田家ニ於テ製作セラレツ、アル茶道具其他竹製目錄ヲ掲ゲ斯家竹材利用ノ技術發達ヲ推察セントス、

- 柄杓、棚物、菓子器、煙草入、花入、茶箱、菓子箸、卷蓑入、香合、菜箸、短冊掛、煙管筒、釜敷、楊枝、掛物軸、矢立、水指、竹檠、掛物箱、緒、茶人行燈、掛燈臺、根付、茶碗、小燈、ランプ、文箱、茶杓、引手、茶碗筒、花月札、建水、筆筒、茶杓筒、三ツ具足、蓋置、小刀、茶筌筒、炭切形、灰吹、茶托、茶巾筒、火吹竹、自在、盃洗、茶箸筒、茶上合、扇掛、サジ、楊枝筒、釘、垂發、辨當、拾得筒、杖、軸盆、猪口、吸物碗、盃、箸倒、盃臺、天目臺、印肉入、フラーク、印材、急須、湯ノ子匙、灰吹蓋、コハゼ、名札入、灰吹臺、楊枝倒、小刀サヤ、茶巾挾、水屋釘、箸筒、茶ッポ、タンボ、木鉢、軸掛、桂掛、烟草盆、帽子掛、香爐、杓子、德利、菓子鉢、ナイフ、手鹽皿、瓶敷、徳

利袴、菓子盆、手拭掛、時計臺、團扇例、唐紙切、酒筒、線香筒、孫ノ手、カ
シザシ、巻紙入、硯、以上

(京都市押小路富小路角 竹器師 黒田宗傳製造販賣)

第二節 本邦竹類需用額ノ一斑 及ビ利用品ノ種類

余ハ我國竹類ヲ毎年如何程如何ナル種類ニ需用シツ、アルカ又其如何程ノ効用アルカヲ觀察セン爲メ想像的ニ計算スルコト次ノ如シ勿論概畧ニシテ多少ノ増減ハ免ル可ラザルナリ(左記計算ハ長田大介氏ノ見積ヲ基本トシ補載ス)

(一)百三十萬圓(此内上等ノ建築用ニハ主ニ苦竹ニシテ次ニ粗雜ノモノハ淡竹、女竹ヲ利用ス)
我邦ノ戸數八百萬戸トシ倉庫納屋離屋敷別荘工場等ヲ二百萬棟トシテ合計一千

萬戸ノ五十分ノ一即チ二十萬棟ノ改築ト人口年々四十萬人増加ニ對シ(最近調査五十萬人ノ増加)六萬戸ノ新築合シテ二十六萬ニ對シ一棟ニ竹五圓宛使用ノ計算

(二)八萬圓(苦竹ノ小物、淡竹類)

八百萬ノ戸數ニ日獲庭園田畑山林ノ垣竹ニ使用スルモノ一戸一本宛、八百萬本トナシ一本一錢ノ割)

(三)六萬圓(苦竹、淡竹類)

一千萬ノ棟數ニ對シ五十分ノ一即チ二十萬棟ノ修繕ニ使用スルモノ一棟二三十本宛六百萬本一本一錢ノ計算

(四)五萬圓(苦竹、淡竹)

農家、漁家、山林其他露店興行等ノ小屋掛一府縣ニ千個ト做シ一個ニ金壹圓宛ノ計算

(五)拾貳萬圓(苦竹、淡竹)

八百萬戸ニ一戸物干竿一本宛使用スルモノトシ一本一錢五厘ノ計算

新築戸數等ニ對シテ必要ヲ生ズルモノトス

(六) 參拾貳萬圓(骨ハ苦竹柄ハ淡竹)

八百萬戸ニ對シ一戸ニ對雨傘、日傘取合一本宛使用スルトセバ八百萬本傘一本ノ原料竹四錢宛ノ計算、近年洋傘大イニ流行スルト雖昔時ハ簞笠ニテ事足リシ山間ノ人モ皆立派ナル楓傘ヲ使用スル時節ニ付傘ノ需用倍々多ク又海外ヘモ輸出ス殊ニ日本ハ雨量多キ國ナレバ傘ノ破損甚シク從テ需用多シトスル所以ナリ)

(七) 五萬圓(骨ハ淡竹苦竹柄ハ淡竹黑竹女竹ノ類)

八萬戸ノ戸數ニ提燈一張宛新製又ハ修復トセバ凡百萬張尙ホ海外輸出及ビ祝日祭日開店ノ景氣ニ神社佛閣船舶車等ニ使用スル分二百萬張トシ合計一千萬張弓柄ト合シ一張ノ原料金五厘宛

(八) 拾五萬圓(苦竹、淡竹、黑竹、女竹ノ類)

人口五千萬人ニ對シ二人ニ團扇、扇子一本宛使用セバ二千五百萬本海外輸出二千五百萬本合シテ五千萬本一本ノ原料竹三厘

(九) 五拾六萬貳千五百圓(苦竹)

全國ノ酒造高凡ソ四百萬石トシ四斗樽ニ入ル時一千萬樽此ノ内四分ノ一ハ瓶詰及ビ直賣トシ四分ノ三ヲ樽詰ノ計算ニシテ其計算ニシテ其半額新調スルモノトスレバ三百七十五萬樽一樽ニ用ウル竹ノ原料十五錢宛ノ計算年々酒造高ノ増額ニ伴フテ竹ノ消費増大ス

(十) 五萬圓(苦竹)

酒造用大桶中桶其他附屬道具ニ竹ノ入用多シトス

(十一) 拾五萬圓(苦竹)

醬油酢ハ大抵酒樽ノ古手ニテ事足ルト雖酒ノ一舛二舛五舛一斗ノ小樽及ビ酢醬油ノ小樽、砂糖樽、味噌樽、油樽、漬物セメント樽、或セメント會社ハ一日ニ二十圓ノ竹ヲ使用ス鹽魚樽、鉛樽等大小五百萬樽一樽ノ竹原料三錢宛ノ計算

(十二) 拾六萬圓(苦竹主ニテ孟宗竹ハ安籠ニノミ用ウ)

凡ソ日本人ノ家屋内ニ大小ノ籠類三個五個十個多キハ二三十個モ所有スル家

アリ籠ハ竹材ノ最モ特長トスル利用ニシテ種類限ナシ今一戸ニ付キ一年ニ二個宛ノ籠ヲ求ムルトセバ千六百萬個籠一個ノ原料竹一錢宛ノ計算

(十三)拾五萬圓(苦竹、淡竹次ニ孟宗竹ハ安直ナル一時的ノモノニ用ウ)

前項記載ノ外ニ最モ多量ニ使用スル籠類例バ生魚鹽魚干魚ヲ汽車汽船ニテ運搬スル籠近年倍々多ク石炭運搬及ビ船積等ニ用ウル一名佐伯籠需要頗ル多シ葡萄柿桃林檎蜜柑夏蜜柑長州萩町ニテ夏橙籠ニノミ使用スル竹六七千圓其他ノ果物ニ使用スルモノ近年果樹栽培進歩ノ結果過激ニ需要増加ス尙ホ養蠶家桑摘籠繭籠茶摘籠茶製籠農家ノ柴籠草刈籠野菜採集籠松茸籠筍籠筍松茸両品ノミニテ京都ヨリ大阪ニ下ルモノ年二十萬籠餘又工藝品運搬籠海外輸出品其他内地ニ運搬スル其品多ク大ナル籠ヲ用フルコト流行ス其他罽及ビイカナゴ籠頗ル多シ尙辨當籠用心籠手提籠行商人ノ荷籠商人ニ非ラズト雖便利上使用ス其類多シ紙屑籠家毎ニアリ魚釣籠鳥籠高價ノ物ハ小鳥籠ナレドモ安價ノモ

ノハ雞其他小鳥類ヲ運ビ又飼養スルニ用ウ)モンドリ籠魚ヲ漁ル等大畧三千萬個原料竹一個五厘宛トシテ計算ス……………要之ニ本邦ハ四海水ヲ以テシ又内地ハ河川湖沼多ク水産ノ業盛ナルコト及ビ農業國タルニ於テモ最モ輕便欠グ可ラザルハ竹籠ノ需用ニアリ多々倍々増加スルノ勢ナリトス

(十四)五萬圓(女竹、斑竹、箱根竹)

五千萬人ノ人一年ニ筆五本宛使用スルトセバ二億トス五千萬本ノ筆一本ノ竹代二毛宛ノ計算(筆鉛筆、ペン先等ニ用ヒラル、ニ至リ或一局所ニハ廢セラレタリト雖一方一搬ノ需用ハ増加シ敢テ其影響ヲ被ラズトス)

(十五)五萬圓(苦竹ノ小物、淡竹、女竹)

養蠶ノ棚ニ用フル竹葡萄梨子桃其他一搬ノ園藝上培養ニ用フル竹類多シ

(十六)六萬圓(布袋竹、黑竹、淡竹、女竹、苦竹ノ類)

内國ニ魚釣竿トシテ用フルモノ大畧三百萬本(一本五圓ヨリ八圓ノモノアリ)日本人ハ河海ニ接スル爲メ大ヒニ釣ヲ好ム最モ農家及官吏其他子供ニ至ル迄釣

ヲ最上ノ樂トス一本貳錢宛ノ計算

(十七)貳拾四萬圓(主トシテ苦竹)

八百萬戸ノ家一戸ニ飯櫃ヲ始メ大桶小桶手桶提桶擔ヒ桶尿桶風呂桶ノ類ヲ三
個宛新調又ハ輪ノ取替ヲ爲ストセバ貳千四百萬個一個ノ竹一錢宛外ノ船舶等
ノ海上用杓鈎瓶棺桶等アレトモ近年バケツ及金屬ニ少々傾分ヲ侵略セラレタ
リト雖併シ乍ラ工業發達ノ爲メ大工場其他ニ使用スルコト大ナルヲ以テ將來
益々需用多ナルヘシ

(十八)四萬圓(苦竹ノ小物、淡竹、黑竹)

座敷箒庭箒門箒シツクイ洗箒一戸ニ一本トスレバ八百萬(柄竹、橫竹、枝竹)合シテ
一本ノ竹代五厘宛尙ホ外ニ汽船帆船等増加ニ伴ヒ之ガ甲板洗ヒニ使用スル物
モ多シ殊ニ本邦人ハ清潔ヲ貴ビ掃事ニ注意スル國ニシテ箒ノ需用著大ナリト
云フベシ

(十九)貳萬圓(黑竹、斑竹、苦竹ノ加工品用)

樂棚、書棚、額縁、椅子、卓子其他上流社會ニ西洋擬ノ竹細工品内地ニ流行ス近來美
術應用法ヲ以テ模様ヲ附シ斑紋ニ加フルニ至リ嗜好増加シ之等ノ細工品ノ必
要増進セリ

(二十)五萬圓(主ニ苦竹)

諸川ノ治水及ビ堤防防禦其他土木上ニ使用スルコト最モ多シ各府縣ニ壹千圓
宛ト見テモ大畧五萬圓實際此上ニ登ルベシ多クハ蛇籠棚等ニ用フルナリ

(廿一)百五拾萬圓(苦竹、淡竹、黑竹、斑竹、女竹)

前數項ニ掲ゲタル外竹ヲ使用スル物ヲ大畧掲ル時ハ次ノ如シ(幟竿、五月幟角力
幟、芝居幟、神社佛閣奉納幟、祭禮幟、大小船舶幟、廣告幟、東西屋幟其他種々)國旗竿(大
阪博覽會ノ爲メ凡ソ五萬本入用ナリシト我國ニ於テハ山間ニ至ル迄之ヲ所有
ス其他何處ニモふらふハ大流行殊ニ日露戰爭以來祝捷ノ爲メ之ガ使用甚ダ増
大セリ

笛尺八ノ類(輸出澤山)具足竹刀(體育發達擊劍流行ノ結果)弓、矢、洋傘ノ柄、全握リ(重

ニ輸出品紙鳶ノ骨杖ステツキ算盤ノ眞竹ランプ(當時流行)洋燈臺自在掛茶杓茶筌茶合茶盆竹花生暖簾竿需用至テ廣シ)衣竹竿手拭掛桶竹筧竹堀拔井戸水拔竹火吹竹(一戸ニ一本以上必ズ入用約一千萬本)ガンジキ長鳶口柄竹杓物尺塗箸ト云ヒ宮島箸名古屋市ニ一ヶ年使用スル原料竹二萬圓餘ナリ)多ク之ヲ用ツ竹楊枝楊枝齒楊枝魚串アナコ屋杯ノ魚商ニ多額ノ需用アリ)柳串田樂及ビ燒豆腐串團子魚串柳行李ノ縁信州竹行李輸出品アリ)農家ノ笠車夫ノ笠人力車ノ母衣竹提灯ノ弓(昔ハ鯨骨ナリシモ今ハ皆竹)機械(箆)糸取車(是ハ近年衰微)竹張下駄煙管ノ羅字竹卷蕒流行ノ世ノ中ナレドモ需要高昔時ニ變ラズ)手遊品竹馬等染物屋ノ搾リ竹鳥刺ノ竹按摩笛藝式ノ旗竿全枝墳墓ノ垣竹霞簾ノ摸縁竹上下ノ簾類上ハ宮殿社等ヨリ下民家ノ雪隠ニ至ル迄需要頗ル廣ク海岸輸出モ拾萬圓以上ニ騰ル竹ノ狀刺玉簾鉢敷鉢蓋食物ノ蓋井戸蓋庭園竹ノ櫛苦竹ノ乾竹ヲ用ウ)布張笠竹洋紙切(近年輸出モ多シトス)庖丁筆筒竹釘總テ木細工ノ板ノ合シ目竹ノ合釘ヲ用ヒ其他上等ナル製靴用ニ案外需用廣ク菓子箱ニモ用ウ或製箱商ニ一ヶ月釘竹五圓宛使用スルヲ見ル)竹梯子外井戸ノ釣瓶竿拂塵子ノ柄(一戸ニ一

本宛八百萬本)彫^{ハコ}是ハ葉竹ヲ以テ製ス酒醬油商ニ重ニ用ヒ其他一般國中ニ使用スルモノ頗ル多シ大阪市內ニテ一ヶ年本品製造ニ使用スル竹一萬五千束位ノ見込ナリト云ヒ海外ニモ輸出ス(船舶用西洋帆ヲ用ヒ其他垣竹水竿竹漁具網及ビ其他漁船ニ苧子多分用ウ)川船用園藝用頗ル廣シ蘭ハ一株ニ一本以上百本モ使用シ牽牛花培養ノ使用其他蔓作物ノ支柱盆栽用等此ノ外數ヘ來ランニハ實ニ際限ナク人智ノ發達ト共ニ技術ノ進步應用ノ結果需要増大ス大畧是等ニ使用スルモノ一億五千萬本トシ一本平均一錢ト見積ル

(廿二)四拾五萬圓輸出用消費

海外へ輸出スル竹材竹器竹籠竹簾細工トシテ輸出スルモノ金高ノ半額ヲ原料竹代トナス

(廿三)百萬圓以上籐ノ利用苦竹淡竹孟宗竹

籐ハ下駄雪駄麻裏等上駄表ハ一足拾五錢以上ニ及ブ其外饅頭餅菓子類肉類魚類味噌類漬物類包及ビ料理屋辨當等實ニ際限ナク需要ノ増加又人口ノ發達生

活程度進歩ノ結果ニ伴フモノトス日露戰役中需用減少ス

(廿四)五拾萬圓以上(筭)

筭ノ産額(京都府下孟宗竹ノミニテ拾參萬圓内外)其他全國押シテ知ルベク從テ之ガ需要ハ一般生活上食用品トシテ増々進メリ尙ホ鑛詰業隆盛ノ結果利用増加ス

以上

竹材價額合計五百六拾六萬貳千五百圓

籐百萬圓

筭五拾萬圓

以上總計金七百拾六萬貳千五百圓

斯クシテ本邦毎歲竹林伐採額凡ソ貳百萬圓内外(三十六年度農商務統計竹材伐採額百七拾九萬四千四百拾圓ニヨリ統計外ノモノヲ加

フトスレバ概略三ヶ年間ノ伐竹材ヲ毎歲利用シ盡ス割合ナリトス其他ノモノ全國精密ナル統計ナキヲ遺憾トスル所ナリ然レドモ該見積額ニシテ尙ホ低キモノヲ取レリトス故ニ實際本邦ニ於ケル國家的利益効用ノ漠大ナル竹ノ價值ヲ了知スルニ足ル可シ加之竹ノ技材ヲ利用スルコト少カラズ或ハ枯損竹ト共ニ燃料ニ用ヒ消費スルコト頗ル多シトス

第二章 竹材外國貿易ノ狀況

第一節 竹材ノ外國ニ輸出セラレタル沿革

竹材ハ我國ノ特産ニシテ既ニ舊時ヨリ盛ンニ竹材ヲ利用セルコト著ルシキガ其利用ノ創始餘リニ遠ク明カニ知ルヲ得ザリシト雖ドモ其本邦産竹材ノ歐米諸國ニ知ラル、ニ至リシハ僅々二十五六年ノコト、ス即チ明治十一年日本ヨリ歐米ニ見本トナシ輸送セルコ

ト之ヲ嚆矢トス次デ十二年十三年頃ニ至ルモ尙見本ヲ出シタルニ過ギズ其後漸クニシテ外國人珍重シ始メテ彼ガ利用ノ途ヲ知リテ商品トナシ輸出スルニ至リシハ明治十五年以後ナリトス然リ而シテ之ガ輸出先ハ第一亞米利加ニシテ次デ英國獨逸佛國ニ及ビ漸次他ノ諸國主トシテ濠太利亞白耳義和蘭香港朝鮮支那等ニ及ビタルモノナリ

斯ノ如クニシテ其後竹材輸出高ノ狀況ヲ觀ルニ其需要ノ變動高低甚シカリキ即チ明治十五年頃ニハ僅カニ五萬圓ニ過ギザリシガ明治二十年頃ニハ俄然二十四五萬圓ニ及ビ更ニ明治三十年ニ至リテ實ニ五十二萬圓ノ頂點ニ達シタリトス畢竟外國人本邦産竹材ニ對スル好奇心ノ勃起愈高マリ一時竹材利用ノ流行ヲ招キ爲メニ竹材價格ノ暴騰シタルニ歸因スヘシ然リト雖モ斯ノ如キ意外ノ順風ハ

到底永續シ能ハズシテ忽チ下火ニ向ヒ三十二年後忽然輸出額ヲ減ズルニ至リタリ即チ明治卅七年度ハ凡ソ四十萬圓ノ輸出ニ及ビタリ之レ一見輸出货量ノ減却シタルカノ如キ疑ヲ生ズト雖モ事實ノ証明スル所竹材輸出數量ノ減ズルニアラズシテ只需要消費ノ權衡上滿ツルモノ久シカラズトノ原則ニ準シテ漸次單價ノ低落シタルニ歸因ス此ノ如クニシテ將來ニ於テモ彼ノ外國人ノ嗜好ヲ變ゼシメズ且ツ本邦竹材商ノ暴利ヲ貪ルコトナク益々品質ヲ撰ビ價格又激變スルニアラザレバ販路ノ擴張ト共ニ竹材輸出數量ハ決シテ減却スベカラザルモノト謂ツ可シ然レドモ竹材利用品輸出ト竹材輸出トハ相容レザルガ如シ

第二節 明治二十九前後外國ニ於ケル竹材商況

(其一) 桑港(米國)ニ於ケル竹材商況

當時在米桑港領事ノ報告ニヨルモノヲ記載スルニ次ノ如シ
 竹ハ東洋ノ特産トシテ頗ル當國人(米人)ノ間ニ珍重セラレ、ヲ以テ
 七八年前始メテ竹器類ノ當港ニ販路ヲ開キシ際ニハ到ル處ニ好評
 ヲ博シ隨ヒテ其價格モ高ク之ヲ用ウルモノハ殆ソド上流社會ニ限
 ラレタルガ元來竹器製造ハ當地ニ於ケル本邦人ノ專賣トモ云フベ
 キ有様ニテ少シク竹細工ニ伶俐ナルモノハ之ヲ製作スルコト難カ
 ラズ又資本ヲ要スルコトモ少キガ爲メニ其好況ヲ聞キテ竹材ノ利
 用製造ニ從事スルモノ次第ニ増加セント共ニ粗製濫造又ハ競賣ヲ
 生シ其結果ハ遂ニ價格ノ下落ヲ招キ之ヲ以テ今ヤ本品ノ需要者ハ
 一變シ中等下等社會ノ人多ク之ヲ占ムルニ至レリ之ニ依テ唯其需
 要増加ノ一点ヨリ觀察スルトキハ販路ノ一段ニ至リテハ低廉ニ非
 ザレバ賣行悪シキガ故ニ製造者ノ收利却テ低減スルニ至レリ、又從

來竹材ノ輸入ニ就キテハ無稅ナリシガ明治二十七年ノ春頃ヨリ當
 港稅關ニ於テハ三割ノ輸入稅ヲ課スルニ至レリ、今其理由ヲ究ムレ
 バ當港ニ輸入スル竹材ハ煤竹様ノ色付模様アルヨリ之ヲ以テ製造
 品ト見做シタルニヨレリ

茲ニ於テ當港在留日本商人ハ之ニ對シ種々苦情ヲ訴フルモノ少カ
 ラザリシガ二十九年七八月ノ頃漸ク再ビ無稅ニ復シタリト云フ
 斯ノ如クニシテ米國ニ於ケル本品ノ用途ハ椅子、植木臺、卓子、榻寢臺
 帽子掛等ニシテ之等利用ニ適應セル輸入竹材ノ多クハ直徑八九分
 乃至四五分迄ニシテ長サ六尺ニ切斷シ之ヲ船積シ來リ當地ニ於テ
 製品トセルモノ多シ而シテ之ガ製造販賣ヲナスモノハカリホルニ
 ヲ州内ニテ少クモ四十軒内外アル可シト而シテ之ガ製造人中ノ七
 八分ハ和歌山縣人ナリトスト

(其二) 伯林(獨逸)ニ於ケル竹材ノ商況

(第一) 竹ヲ以テ家具ニ製造スルコトハ流行ト嗜好ノ變遷ニヨリテ少シク減シタレドモ該品ハ種々ノ工業ニ利用セラレ且ツ今後モ從來未ダ知ラレザル所ノ用途ニ使用セラルベキヲ以テ一般ヨリ見レバ需要ノ減少ヨリモ寧ロ増加ノ見込アリトス而シテ根付又ハ根ヲ落シタル直徑二十四乃至三十ミリメートル以上ノ黒竹ノ欠乏ハ大ニ竹材ノ賣行ヲ妨ゲ一般黒竹ノ利用ヲ阻喪シタルナリ反之若シ右直徑竹材ノ多量ニ存セシナランカ即チ充分ノ販路ヲ得タルナラン尙ホ直徑九乃至十四ミリメートル以下ノ竹材ノ欠乏モ多少竹材ノ需要ニ影響ヲ及ボシタリ又黒竹及ビ黃竹ノ釣竿ハ魚漁具トシテ使用セラレ需要常ニ堪ヘザルヲ以テ日本ヨリ若シ多量ニ之種ノモノ輸出スルヲ得バ一層其販路ヲ擴ムルコトヲ得

ベシ又日本ヨリノ竹材輸出高ヲ増加セシメンガ爲メニ臺灣ニテ其植養ヲ計ラシコト一般ニ希望スル所ナリトス

(第二) 獨逸ニ於ケル著名ノ竹材商二十九年頃ニ調査セラレタルモノヲ列擧スレバ次ノ如シ

- 一、イハララムゼーゲル會社(在漢堡)
- 二、ヘツセルマン兄弟會社(在漢堡)
- 三、コールシユライベル及ビシンネル(在漢堡)
- 四、オットー・シユツク(在伯林)
- 五、フレルハイム及ビヘツク(ふらんくふるとあむまいん)
- 六、ウエーツエーマイエル(はいるふるひあむあるべ)

(第三) 竹材ハ需要ニ從ヒ日本ニ注文シテ取寄セ又ハ在神戸橫濱獨逸商社へ輸出ヲ仰ク竹材ノ販賣ハ漢堡ニ着荷ノ後元拵ノ儘ヲ以テ

シ伯林ニ送り出スモノハ其量少シトス
(第四) 重土染竹ハ獨逸ニ於テハ全ク其賣口悪シク黒竹ハ成ル可ク
色ノ黒キヲ望ミ先年數回獨逸ニ輸入セラレタル如キ斑竹ハ望手ナ
ク而シテ黄竹ハ成ル可ク色澤ノ鮮明美麗ナルヲ望メリトス

(其三) 巴里(佛國)ニ於ケル竹材ノ商況

巴里ニ於ケル竹材年々ノ消費額ハ凡ソ二十五萬法ニシテ主ラ家具
椅子及ビ花園用器具ノ製造ニ供ス代價ハ量目ニ依ラズ箇數ヲ以テ
定メ竹ノ種類品質大小及ビ長短ニヨリ等差アリトス
今該品取引商社ノ重ナルモノヲ舉グレバ次ノ如シ

Gradwohl, 5 Rue de Montmorncy a Paris.

尙ホ外ニ巴里本邦雜貨商社 Dubieffert & Cie 13, Rue Bleu a Paris, ノ如キ
亦之ガ取引ヲサザルニアラザレドモ該社ハ寧ロ竹材ハ委託販賣

ノ方ヲ所望セル趣ナリト

(其四) 倫敦(英國)ニ於ケル竹材ノ商況

竹材ハ英國ニ於テ重ニ椅子、隅棚、珍器棚、鏡臺、書架、額縁、屏風縁及ビ茶
机等各種ノ家具、其他杖及ビ蝙蝠傘ノ柄等ニ使用シ又庭園ニ於テ花
木ノ支柱ニ供セラレ
現今當地ニ於テ最モ需要ナル品種ハ普通鼈甲ト稱シ即チ鼈甲様ノ
色付ヲ爲シタルモノナリ然レドモ是レ固ヨリ一時ノ流行ニ止マル
モノニシテ其需要ノ何時衰廢スルヤ測リ難ク且ツ目下荷蒿シノ有
様ナリト云フ

而シテ英國ニ於テハ竹材ハ通常束トナシテ輸送シ日本ヨリ當地迄
ノ運賃ハ四十立方尺ニ就キ凡ソ二磅ナリトス然レドモ之レ平素ノ
時ニシテ日露開戦中ノ如ク内國船外國輸送ノ爲メニ不足ヲ生ジタ

ルガ如キ時ニ於テ輸出ノ便平素ノ如クナラズ運賃又多少ノ騰貴スルハ免レザル所ナリトス

次ニ英國ニ於ケル竹材ノ販賣狀況ヲ記スレバ本品ノ取引ハ大抵日本ニ代理店ヲ有スル當地ノ竹材輸入商ニ於テ直接日本ヨリ輸入シ需要者ニ供給スルヲ常トシ其仲買商ノ手ヲ經ル場合甚ダ稀有ナリトス但シ其仲買人ノ手ヲ經ル場合ニハ賣上代ハ六週間ヲ以テ支拂期限トナシ割引ナシト云フ

本品ハ當國ニ於テ日本ヨリ輸入セラル、外又支那及ビ印度ヨリ來ルモノアルト雖モ其内日本産竹材ハ總輸入額ノ大半ヲ占メ從テ他國産ノ競争ヲ受クルコト殆ンド稀レニシテ唯庭園ノ使用ニ於テ稍ヤ支那産ト競争アルノミトス

要之ニ本品ハ元來廉價ノモノナレバ價格ニ於テハ倫敦ノ輸入總額

僅カニ數千磅ニ過ギズシテ英國ノ統計表中未ダ本品ノ類別ヲ見ルニ至ラズ從テ各國ヨリノ輸入増減ヲ詳知スルニ由ナキモ其需要漸次増加ノ模様アルハ疑ヲ入レズ之レ本邦ヨリ米國ニ輸出セララル、狀況ヲ見ルモ亦明カナリトス

第一節 外國向竹材ノ需要及ビ供給

本邦産竹材ノ外國ニ於ケル需要ハ前節述ベタルガ如ク國ニヨリ其嗜好ヲ異ニスルヲ以テ其輸出モ亦從テ其需要ニ應ゼザル可ラズ更ニ又其竹材ノ大サニ於テモ殆ンド國々ニヨリ一定セルモノアリト謂フ可シ

今其外國向竹材種類ヲ列舉スレバ次ノ如シ

- 1、黒竹
- 2、黒竹根付
- 3、虎竹
- 4、虎竹根付
- 5、白竹(苦竹ノ油拔)
- 6、白竹根付
- 7、燒竹(ワニス引)
- 8、燒竹窓掛
- 9、燒竹(鼈甲)

竹 10、燒竹根付 11、霜降及ビ梨地竹及ビ其根付 12、染付竹(黃赤青紫等ニ着色セシメタルモノ) 13、白女竹 14、燒女竹 15、布袋竹(五三竹) 16、黑竹釣竿 17、白竹釣竿 18、布袋竹釣竿 19、瓦斯燒竹(模様各種) 20、鞭根

(備考) 以上ノ内(1)乃至(6)及ビ白女竹ハ天然産ノモノニシテ僅カニ油

(竹漚ヲ抜キタルモノニシテ且ツ自然ノ曲リヲ修正シタルモノナリ、

燒竹ハ人工ヲ以テ本來ノ苦竹淡竹及ビ女竹ニ籠甲色ヲ付シタルモノニシテ其斑

紋濃淡ハ又各國需要ニ應ジ異ナルモノアリ

染付竹モ亦多ク苦竹ヲ用ヒアニリン色素ニ表面着色ヲ付シ多少ノ斑紋ヲ施セル

モノナリ

霜降及ビ梨地竹モ亦人工ニヨリ微細ナル斑紋ヲ付シタルモノニ過ギズ

斯ノ如クニシテ以上貿易竹材ヲ大別セバ次ノ如シ

(1) 天然竹 (Natural Bamboo)

之ニ屬スルモノハ普通三種トス

(ア) 白竹 (Yellow Bamboo) (イ) 黒竹 (Black Bamboo)

(ウ) 虎斑竹 (Brown speckled Bamboo)

(2) 人工竹 (Artificial Bamboo)

之ニ屬スルモノハ次ノ二種ヲ主トス

(ア) 燒竹 (Tortoise Bamboo) 焦燒法ニヨリ白竹ニ着色セルモノ

(イ) 染付竹 (colored Bamboo) 色素ヲ以テ着色セシメ斑紋ヲ付シ美麗ニ

ナシタルモノ

次ニ現今之等外國向竹材中需要ノ大部ヲ占ムルモノヲ列記スレバ
次ノ如シ

(一) 燒竹(籠甲竹) (二) 白竹 (三) 黒竹 (四) 虎竹 (五) 釣竿

(備考) 瓦斯竹ハ近年ノ發明ニヨルモノニシテ目下見本ニ屬スルモノ

次ニ外國ニ於ケル需要主ナル大サ及ビ種類ヲ各國ニヨリ記スレバ
凡ソ次ノ如シ

英。米。二國ニ於テハ直徑八分以上ノモノ長サ六尺以上八尺

獨。逸。國五分六分七分物ニシテ長サ八尺

佛。國ハ釣竿ヲ多ク需要ス

英。米。佛。ノ諸國ハ最トモ燒竹ヲ貴重ス而シテ濃淡ニヨリ又其ノ

嗜好ヲ異ニス即チ英國向キハ素燒米國向キハ藥品燒及ビ淡燒

ナリトス

獨。逸。ハ天然生ノ白竹及ビ黑竹材ヲ好メリ

露。國ハ本邦産黑竹ノ良好ナルヲ嗜メリ

染付竹ハ英。米。ノ二國ニ限ラル、モノトス

瓦斯燒竹ハ近年米國ニ向テ輸出セラル、エ至リシモ未ダ繁盛

ナラズ將來ノ嗜好如何ニ關スベシ

釣竿ハ國ニヨリ其長サヲ異ニス即チ

米國向キハ十二尺乃至二十尺ヲ多シトス

佛國向キハ五尺以上參十尺ニ達スルモノ

釣竿ノ賣價ハ長サニヨリ甚シキ差異ヲ有セルモノナリ即チ

十二尺物 (百本ニ付) 壹圓參四拾錢

廿尺物 (百本ニ付) 參圓參四拾錢

根付竹材ハ淡竹黑竹ノ專有トスル所ナリ而シテ其最トモ利用セラ
ル、ハ杖用及ビ傘ノ柄ニシテ從テ長サ三呎十吋(三尺八寸)ノ小物ヲ
用ウ

黑竹ノ根付ハ其根元短キヲ貴重ス故ニ山城地方ニ産スル栽培手入
ノ充分ナルモノハ却テ節間長キガ爲メ需要ニ適セズ天然生中着色

ノ濃ク節間ハ短キモノ賞美セラル
霜降竹ハ魚油及ビ塩酸ヲ塗リ後又「ごふん」ヲ塗リ更ニ之ヲ焼キタル
モノニシテ傘柄及ビ杖柄トナシ貴重セラル
梨地竹ハ前者ト同シキモ「ごふん」ノ代リニ砂ヲ用ヒ其斑点微小ナル
モノニシテ其用法前者ニ同シ

根付竹ハ其精製法ニ三種アリ何トナレバ其製作ノ如何ハ價格ニ影
響アルヲ以テナリ而シテ其長サハ三呎十吋及ビ六呎六吋ノ二様ヲ
標準ノ長サトス之ガ精製法ヲ舉グレバ

(1) 砥石磨法 (2) 鑪磨法 (3) 又物磨法 ノ三種トス
又釣竿トナスモノ、長サノ長短範圍ヲ示セバ

(竹ノ種類) (最短ノ長) (最長ノ長)
白釣竿 四尺 三十尺

黒釣竿 四尺 二十四尺
布袋釣竿 四尺 二十二尺

以上竹材ノ大小長短ニヨリ賣價ノ變動ハ時ト共ニ波動アリ尙ホ鞭
根ハ苦竹及ビ淡竹ノモノヨリ採收スレドモ前者ハ後者ニ優リ其輸
出先キノ主ナルモノハ獨逸ナレドモ其量極メテ僅小ナリトス尙ホ
布袋竹ノ鞭根賞美セラル、モ其産額少シ、

第三節 外國向キ竹材ノ本邦ニ於ケル産地
及ビ其種類品質

毎歲神戸市ニ於テ數十萬圓ノ竹材貿易ハ元來竹其ノモノ、價廉ナ
ルガ故ニ其數量ニ於テハ至大ナルニ驚カザル可ラズカノ明治三十
一年頃竹材ノ商況最良好ナリシハ過渡ノ時代トナリ爾後假令價格
一般ニ低落セリト雖ドモ然カモ外國ノ需要ハ増加ノ勢ヲ呈シ從テ

本邦各地竹材ノ伐採供給量ハ漠大ナリトス而シテ之等外國向キ竹材ハ主トシテ彼等本國ニ於テ家具裝飾用ノ竹器ニ利用セラル、モ
 ノニシテ本邦ニ於ケル主ナル竹材利用ト大ニ其趣ヲ異ニスル所アリ此ノ如クシテ貿易竹材ノ品質大サ等概ネ日本人ノ要求ト異ナル
 モノナリ故ニ我國竹材産出地ノ首位ヲ占ムル京都府下ノ如キハ却テ貿易竹材ノ産出地ニ算入セラレザルモ理由ノ伏在スルアレバナ
 リ
 即チ京都産竹材ハ其額多量ニシテ充分外國輸出ノ用ニ供シ能フ可
 キ觀アルモ其栽培法ノ周到ナル爲メニ竹材良好肥大却テ彼レガ嗜好ニ充當シ能ハザルト價格ノ引合ハザルガ故ナリ而シテ京都産竹材ハ主トシテ近傍ノ需要地ニ多大ノ販路ヲ有セリ乃チ池田伊丹大阪堺地方ノ酒造業者ノ酒造樽カ用ニ適シ又遠ク北海道東北ニ及ブ

ト云フ故ニ之ガ竹材供給地ノ如何ヲ知ルハ竹林經營上又以テ必要ナリト謂フ可シ

斯ノ如クニシテ本邦産竹林地多ク廣大ナル地域ニ分布スト雖ドモ神戸市ニ輻湊セラル、範圍ハ凡ソ一定ノ地方ナリトス今之ガ多額ナル數量價格ヲ産スルモノヲ順次縣別セバ次ノ如シトス

山口縣 大分縣 高知縣 愛媛縣 廣島縣 岡山縣 和歌山縣 等

之レ其海上輸送上便宜ナルト又竹材面積ノ多少伐竹量ノ盛況如何ニ歸因ス

尙ホ外國向キ貴重竹種及ビ其産出地ヲ掲ゲレバ

(1) 黒竹ノ産地

土佐國高岡郡吳村(本村ハ黒竹ノ品質良好産額最多)

京都府乙訓郡向日町

和歌山縣日高郡原谷

其他ハ伊豫備中讃岐豊前安藝阿波薩摩ノ諸國

(2) 虎斑竹

廣島縣豊田郡三原産之ノ地上等トス

豊前國高田郡

其他ハ高知土佐安藝筑後丹波ノ諸國

(3) 斑紋竹

長門國小物多ク産ス

讃岐丹波阿波伊豫ノ諸國

(4) 布袋竹

伊豫日向

(5) 女竹

長門産(園藝用)伊豫

(6) 四方竹

日向

(7) 胡摩竹

伊豫

(8) 根鞭

土佐近江(栗田郡草津町)日向薩摩

(9) 苦竹

山城(内國用)長門大分(外諸縣)尤モ多ク産ス

今之等ノ狀況ヲ畧記セシニ根付竹ハ第一ト山口縣ヲ第一トシ和歌山縣之ニ次グ山口縣ニテハ阿武郡萩ヲ第一トシ茲ニ中心ヲ定メ北ハ石州地方ヨリ南下ノ關以北豊浦大津ノ二郡一帯ニ涉ルモノニシテ主ニ苦竹ノ小物及ビ女竹多ク其品質大分縣産ニ優ルモノトス

大分縣産ハ豊後一帯耶馬溪ノ上流ニ多ク從來當縣下ノ一地方ハ竹林地之開墾ヲ希望シ之ヲ燒拂ヒ却テ竹林退治策ニ汲々タリシト云フ然ルニ近年道路改修交通ノ便開ケタルト一方神戸市ニ於ケル賣易竹材需要ノ甚大ナルノ点ヨリ意外ノ利益ヲ舉グルニ至リ漸次其價值ヲ昇シ現今ハ仕上後神戸ニ輸送スルコト盛大ノ域ニ達セルモ

ノトス、宮崎縣モ亦之レト同一ノ情態ヲ有ス其他諸縣竹林ノ產出地何レモ外國貿易用竹材需要ノ高マリシト交通ノ便開發セルトニヨリ著シク之ガ利用ノ途ヲ進歩スルニ至レリ、我國竹材貿易ハ輸出港中神戸ヲ以テ第一トナシ此地竹材貿易商十餘軒ニ達ス然カモ我國竹材貿易商ノ首位ニ立ツハ長大社社長長田大介氏ニシテ氏ハ本店ヲ神戸市兵庫住吉町一丁目ニ設ケ尙ホ同地支店ヲ大阪南區高津六番町ニ設ケ又其出張所ヲ兵庫南逆瀬川町及ビ神戸市加納町内五丁目及ビ山口縣萩濱崎町ニ置キ更ニ又代理店ヲ愛媛縣喜多郡大洲及ビ廣島縣豐田郡三原地方ニ分配シ互ニ本店ト連絡ヲ保持シ外國貿易竹材集散ノ便ヲ計リ其盛況一度足ヲ之等店頭ニ踏入セバ忽チ之ヲ伺ウニ足ルベシ、斯ノ如ク本邦竹材ノ輸出ハ殆ンド九十九%ヲ神戸港ニ吸收セラレ

然カモ神戸市竹材商十餘軒一組合ヲ組織スト雖ドモ其年輸出額ノ主ナルモノヲ檢セバ實ニ長大社ハ全額ノ五十乃至六十%ヲ占有シ次デ大ナルモノハ神戸市雲井通五丁目ナル石樽常次郎氏ナリトス然リ而シテ之等外國輸出ノ實行ハ主トシテ神戸外國雜貨商ノ手ヲ經ルモノ多ク直輸出ハ僅少ナリ米國桑港ニ於テハ上田某竹材ノ販賣ヲ企テ直接取引ヲナスト雖ドモ其他未ダ各國ニ代理店ヲ設置セズ

次ニ現今諸外國ニ於ケル竹材取引先キヲ掲グレバ次ノ如シ

新嘉波 オデッサ(露國)

倫敦(英國) パーシングハム(全上)

巴里(佛國) カエン(全上) ナンシー(全上)

漢保(獨逸) 伯林(全上) ノイウルム(全上)

ロッタダム(和蘭)、イントワープ(白耳義)
 桑港(米國)、シヤトル(米國)、シカゴ(米國)、フィラデルフィヤ(米國)
 ボートランド(米國)、タコマ(米國)、シンネヤボリス(米國)
 紐育(米國)、ヨークランド(米國)
 ヴイクトリヤ(加奈太)、メキシコ市(墨西哥)
 ギユアダラジャウ(メキシコ)
 メルボルン(濠洲)、シドニー(全上)、ブリスベン(全上)
 アデライド(全上)、北清ダルニー、香港 等

依之觀之、其數最トモ多キハ米國ニシテ次テ濠州及ビ獨佛英ノ諸
 國トス、濠州ニ於テ近年竹材輸出ノ大ナルニ至リタルハ從來竹器ト
 シテ多量ニ輸出セルモノ、晚近本國ニ於テ製作スルニ至リ從テ竹器
 ノ輸出ヲ減シ竹材ノ輸出ヲ大ナラシムルニ至リタル結果ナリ、

第四節 外國輸出ノ狀況

今茲ニ農商務統計最近三ヶ年ノ記載ヲ掲ゲ輸出額ヲ參考トナサントス

竹材輸出港別價額表

(港名)	(三十六年)	(三十五年)	(三十四年)	(平均三ヶ年)
横濱	三、九三九	五、五三七	一一、五〇二	六、九九三
神戸	二二五、四八三	二八九、七二八	三六五、一〇二	二九三、四三八
大阪	一七六	一一〇	三二一	一九九
長崎	一、五八九	四、〇二六	三、四四七	三、〇二一
函館	一九〇	二二〇	八四	一六五
其他諸港	八、三三四	四、六五八	五、九三九	四、二九七
計	二三九、六一一	三〇四、二八五	三八六、三八五	三三〇、〇九三

明治三十六年度竹材輸出總額ノ平均額及ビ前年度ニ比シ甚シキ減
 少セル原因ヲ尋ヌルニ其第一ノ竹材顧客タル米國ニ於テ該國當業
 者ガ本邦ヘノ注文ヲ手控ヘタル結果同國向キ輸出ノ不況ヲ極メタ

ルト第二英國向キモ三月頃迄弗々輸出アリタルノミニシテ其後ハ殆ド杜絶ニ歸シ九月以降幾分快復ニ向ヒタルニ過ギザリシヲ以テ之ガ主因トナスベキト雖ドモ尙本品市價ノ低落ハ亦前掲統計ニ於ル輸出價額ノ減退ニ與フテ力アリシモノト云フベシ尙茲ニ三十六年度竹材ノ平均市價ヲ舉テ以テ其証據トセン乎

竹材價額表

(竹種)		(太サ)		(價額)(一本ノ單價)	
白竹及ビ燒竹	長六尺五寸	徑四分	八	厘	
黑竹	長六尺五寸	徑四分	七	厘	
白釣竿	長一二尺	長二〇尺	壹錢壹厘	貳錢七厘	

斯クノ如クシテ之ヲ前年平均相場ニ比スルトキハ黑竹及ビ白釣竿ハ一割半、白竹、燒竹ハ一割方ヲ下落セリ之ニ依テ見ルモ其如何ニ本品ノ輸出價額ヲ統計ニ及ボシタルヤヲ知ルベシ、次ニ明治三十六年度輸出ノ主ナル品類國別ヲ掲グルトキハ次ノ如シ

(輸出國名)

米 國 向
英 國 向
獨 逸 向
佛 國 白 曼 耳 向
和 蘭 向
露 國 向

(竹種)

白釣竿及ビ燒竹ノ二種大半トス
燒竹十中ノ七ヲ占メ其他ハ黑竹、虎竹
黑竹及ビ白竹
黑竹及ビ白竹
燒竹及ビ白竹
黑竹

(次ニ昨明治三十七年度ニ於ケル竹材各月輸出ノ港別表ヲ示シテ
 卅七年度ノ商況ヲ知ラントス)

目次	港名				合計
	横濱	神戸	大坂	其他諸港	
一月	21,000	10,913,797	—	5,340,000	20,866,197
二月	31,000	3,750,310	—	3,091,800	3,336,010
三月	31,000	2,713,490	—	4,511,150	2,804,240
四月	32,200	3,030,510	2,550	1,929,600	3,347,560
五月	32,200	2,647,110	—	6,471,800	2,741,130
六月	36,000	3,342,610	—	1,711,630	3,350,250
七月	35,000	1,658,370	1,500	1,551,100	1,697,500
八月	31,000	10,694,510	6,100	2,561,070	2,207,700
九月	23,400	1,736,910	25,000	1,101,300	1,776,610
十月	16,400	1,760,700	7,000	3,181,510	1,921,130

十一月	21,700	1,237,220	7,000	9,131,320	10,351,020
十二月	17,500	1,413,650	—	2,101,300	1,638,310
計	360,000	27,123,620	5,270	70,211,700	26,251,130

(備考) 本表ニヨリ之ヲ見ルモ神戸市ハ我竹材輸出ノ殆シド全部ヲ司リ其勢力
 盛ニナルヲ知ルベキナリ

斯ノ如クシテ三十七年ノ輸出總額貳拾八萬貳千五百參拾壹圓ハ前
 年度三ヶ年平均ヨリ僅カ參萬圓減退ノ勢ナレドモ三十六年度ノモ
 ノニ比シ四萬以上ノ増加ヲ示セリ之レ市價ノ快復及ビ日露開戦後
 我連戦連勝ノ結果ナリト云フベシ

(備考) 竹材輸出ハ關稅ヲ課セザルガ爲メニ從テ其價額ヲ低落シテ輸出セルモ
 ノニシテ統計額ハ實際額ニ及バザルコト遠シト云フベシ

第五節 輸出竹材ノ額ト内地伐竹額トノ關係

凡ッ我國毎年百八拾萬圓ノ竹材伐採額ヲ存スルトシ(事實上尙多數

ナルモ又我邦輸出竹材總額凡ソ參四拾萬圓ト見積ルトキハ僅ニ海外輸出高ハ全伐採額ノ六分ノ一乃至五分ノ一ナリト云フベシ之レ本邦竹材ノ利用多ク別紙掲グルガ如キ多額ノ需要アルガ爲メナリト云フベシ然レドモ海外輸出トシテ天惠ノ竹材收入ニ向テ向後充分ノ便益ヲ與ヘ利益ヲ増殖スルノ手段ヲ施サル可ラズ而シテ之レ又我國經濟ニ及ボス所至大ナリト云フベシ

從來山城産黒竹ノ如キ最モ海外ニ名ヲ傳ヘタリト雖ドモ當時奸商ノ伐採不法ニシテ無法ノ利益ヲ獨占セントシタルノ結果俄カニ外人ノ信用ヲ損シ價額ト需用ノ暴落ヲ見タル結果ト更ニ近年山城地方一帶ニ貴重サレタル淡竹自然枯ハ黒竹ニモ同一ノ被害ヲ與ヘ共ニ供給ヲ減ジタルハ著シキ現象ニシテ如此ハ輸出竹材ノ將來ニ於テ影響スル所大ナリト云フベシ目下輸出黒竹ハ主トシテ四國ノ讚

岐高知地方ノ産ヲ以テ充タセリト云フ今後ニ於ケル各地黒竹林經營ノ可否如何ハ尙ホ研究ノ材料タルベシ尙ホ累年輸出表ヲ掲ゲテ内地伐竹量ノ關係ヲ明カニセントス

木竹材輸出入累年比較表

(年次)	(木材)	(竹材)	輸出	輸入
明治二十七年	二七五八二三	一八八九六四	一五九六三一	七五六四八
明治二十八年	二六一五三三	二八三三三八	二二〇五〇四	四五八三三三
明治二十九年	三七一三四一	三二四九九六	四一〇五〇四	四五八三三三
明治三十年	三七六〇七九	三七七五一九	二四二六四六	三九四一三六
明治三十一年	四九二五〇七	五一二四六一	三九四一三六	六四〇七五六
明治三十二年	八九七六二二	二八二五八七	三九四一三六	六四〇七五六
明治三十三年	一〇六三三三三	三四七六四九	三九四一三六	六四〇七五六

明治三十四年	一一一九六一六	三八六三八五	四六七五〇六
明治三十五年	一一四〇九一一	三〇四二八五	三七三一四一
明治三十六年	一七四五七三六	二二九六一一	五二一五六九
(平均)	(七七二二四九)	(三二四七六〇)	(三五五二九五)

(備考) 三十七年度ノ竹材輸出合計貳拾八萬貳千五百參拾壹圓

本表ニヨリテ我國木材ノ輸出高ハ十年平均凡ソ竹材輸出高ノ二倍以上ニ及ベリ而シテ竹材ノ如キハ事實尙ホ統計表ノ以上ニ達シ居ルモノナリト知ルベシ更ニ木材ニ至リテハ本邦ヨリ輸出スルモノアリト雖ドモ更ニ又高價ノ貴重木材ヲ輸入スルコト甚シク即チ前表示ス所ノ輸出入木材ノ差ヲ取ルトキハ四拾壹萬六千八百五拾四圓ノ輸出超過ヲ見ルノミニシテ殆ド竹材輸出高ニ大差ナシト云フベシ而シテ我竹材ハ東洋産竹材中優等ノ品質ヲ具ヘ他國ニ輸出ス

ルノミニシテ日本特有ノ林産物海外輸出品ナリト稱スベシ斯ノ如クニシテ將來益々之ガ増進ヲ計ラシ爲メニハ充分内地竹林ノ改良進歩ヲ計リ又益々蓄積ヲ滿シ向後木材ト共ニ其位置ヲ相讓ラシムルナク内地需要ニ對スル供給ト海外需要ニ對スル供給ト相待チテ竹林經營ノ方針ヲ定ルハ我が竹林國ノ要務ナリトス

第三章 本邦竹材利用品ノ貿易狀況

竹材ノ外國貿易盛ナルハ之レ輸入國ニ於テ竹器類其他ノモノニ利用スルニヨレドモ尙ホ本邦ニ於テ竹材利用品ノ製作物甚ダ多ク之ヲ輸出スル産額モ至大ナリトス今其主ナル種類ヲ舉レバ

竹器、竹籠、竹廉、竹細工、扇子、團扇、其他各種製品

之等竹材利用製作品中現今ニ於テ其最トモ需要多ク從テ輸出勢力ノ大ナルモノハ竹器ニシテ之等海外輸出中最モ多額ノ供給ヲナセ

ルハ神戸港ナリ即チ全部ノ九十九分ヲ占メ從テ神戸市及ビ其近傍
ヲ以テ主ナル供給地トナス尙毎月之等輸出品ハ大日本山林會報中
森林關係產物輸出入表ニ示スガ如シ

第一節 竹器ノ貿易狀況

輸出竹器ハ近年神戸大阪横濱ノ諸港ヨリ產出スト雖ドモ最モ神戸
市ヲ以テ其特產地トス故ニ市中其職工及ビ之ガ商人又少カラズ然
カモ神戸市三宮町一丁目百八十五番邸中井商店ハ合名會社ヲ以テ
竹器製造卸賣直輸出商タリ故ニ當店ハ本邦輸出竹器ノ創始者タリ
ト云フ今其沿革ヲ畧述センニ明治十四年ノ頃當社現社長中井政吉
氏ガ古來茗醺ノ用器等ニ竹ノ使用セラレタルヲ見是ヲ各種ノ家具
ニ應用シ廣ク歐米ニ輸出センコトヲ思ヒ之ヲ自ラ職人ヲ大阪市ヨ
リ雇入レ職工ヲ養成シ種々意匠ヲ與ヘテ洋風ノ香水棚書棚ヲ製造

セシメ之ヲ英國ニ試賣シタルニ始源シタルモノナリト云フ而シテ
當時之ガ原料黒竹ヲ用ヒ茶方風ナリシ故ニ工作微妙ヲ盡セルモ尙
柔軟タリシヲ免レズ幸ニ當時彼市場ニ大ニ觀迎ヲ受ケタリシト雖
トモ未ダ工作ノ方法幼稚ニシテ到底多數ノ需要ヲ見ル能ハザリシ
爾來幾多ノ困難ヲ排シ多々改良ノ結果漸ク其聲價ヲ高メ二十五年
當店ヲ設立シ次テ二十七八年日清戰役ニ際シ我國威四海ニ轟クニ
至リ益々本邦竹器ノ需要ヲ勃興セシメタリ尙ホ竹細工ヲシテ外人
ノ奇好ニ適センメシハ竹器ノ解キ離シヲ行ヒ後之ヲ組立ツルノ便
ヲ得タルニ至リ又製作ノ進歩ニ伴ヒ價ノ高直トナリタルモ竹器輸
出ノ隆盛トナリタル原因ニシテ遂ニ三十五年合資會社ヲ組織セリ
ト云フ其種類ヲ舉レバ下ノ如ク今ヤ年々ノ輸出高貳拾五萬圓ニ上
リ合資會社ヲ組織スルニ至レリ

左ニ其種類ノ重ナルモノヲ舉グレバ

椅子 (Chair). 花臺 (Flower stand). 樂譜臺 (Music Stand). 鏡椽爐屏
 (Fire Screen). 書棚 (Book Cases). 腕木 (Brackets). 屏風 (Cabinets).
 簞笥 (Corner). 寫字臺 (Desk). 畫架 (Easels). 銅羅臺 (Gong stands).
 窓掛 (Overmantels). 棚 (Paper racks). 長椅子 (Sofas). 腰架 (Stools).
 机 (Table). 化粧臺 (Toilet chest). 豆椅子 (Tortois bamboo Toys).
 洋傘 (Umbrella). 傘棚 (Umbrella stand). 書物架 (Whatnots). 仕事箱
 (Work box) 其他……

等ニシテ工作ノ如何ニ依リ構成ノ妙ヲ盡シ美麗高尚ナル歐米人種
 ノ嗜好ニ適セシメタルモノナリ現今當社ハ本邦輸出竹器總輸出高
 ノ大半ヲ製出シツ、アリテ目下三十一ヶ所ノ處屬工場ヲ有シ五百
 八十人ノ徒弟職工ヲ有シ一ヶ年ノ産額拾六萬圓ニ及ベリト云フ

今之等製作品ノ材料ヲ求ムルハ神戸市竹材商長田商社等ヨリ直接
 竹材ヲ購入セリ、今其利用竹材ノ種類ヲ舉レバ第一燒竹(鼈甲竹)ニシ
 テ其大サ一インチ半乃チ寸上チ大トシ小ナルハ四五分位ナリ次テ
 黒竹ニシテ其大サ前記ノ如シ尙竹ノ枝材ヲ使用スルコト少カラズ
 而シテ需要上燒竹八分黒竹二分ノ割合ナリ燒竹トハ主ニ苦竹ノ小
 物ヲ用ヒタルモノトス染付竹ハ竹器トナシ漸次褪色ノ恐アルト製
 作中湯ニ投ズルチ以テ割裂ノ憂アリ貿易竹器トシテ不良ナリトス
 竹器ト其價格原料竹材ト絹地紙木片針等ト手間トニヨルモノニシ
 テストーブカクシ (Fire Screen) チ除ケバ家具ハ四分六分ノ割合ニシ
 テ原料中竹材チ最モ多トス即チ十分ノ四内外ハ竹材ノ原價チ費セ
 リ故ニ拾六萬圓ノ産額ニ用ウル竹材ノ原料ハ五六萬内外タリトス
 尙之ガ竹林地ノ生材賣却額ニ見積ルトキハ少クトモ貳參萬圓タル

ベシ
 次ニ輸出竹器貿易上ノ狀況變遷ヲ記スレバ其始メ英國ニ輸出シタ
 リシヲ以テ一時盛ンニ需要セラル主ニストーブカクシヲ多シトセ
 リ然レドモ現今木製品ノモノヲ代用スルニ至リ竹器ハ稍々遠カレ
 嗜好ノ一變シタルニ歸スベシ次デ濠州ニ一時盛ンニ輸出セラレシ
 下雖ドモ貿易竹材ノ現今輸出セラレ爲メニ直接竹器ノ輸入ヲ減少
 セシメタリ目下輸出先キノ需要多キハ南米南亞弗利加メキシコ地
 方ナリトス尙ホ日露開戰以前ニ於テハ露國人ノ嗜好又大ナリシト
 雖モ開戰以來北清貿易ノ絶ヘタルガ爲ニ北清方面ノ販路ヲ失ヒ最
 近南亞弗利加殖民地地方ノ嗜好最モ盛況ナリトス

第二節 竹籠ノ貿易狀況

本邦竹籠ノ嗜好モ亦諸外國人ニ勃起シ其輸出商況モ從テ甚大ナリ
 乃チ三十六年頃ニ於テハ毎月貳萬圓以上四萬圓内外ノ輸出高ニ上
 リ其一年總額參拾四五萬圓ニ及ベルモノナリ尙ホ最近三十七年度
 ニ於ケルモ毎月貳萬圓内外ニ達セリ而シテ輸出竹籠ハ内地需要ノ
 如ク粗惡ニシテ廉直ナルモノニアラズ何レモ美術的ナルト技術ノ
 巧妙ヲ要スルヲ以テ其原料竹材ハ主トシテ上等ノ苦竹材ヲ用ヒ尙
 ホ種々ノ着色ヲ施スモノアリ故ニ賣却價額ニ比シ原料ハ比較的少
 キモノナリトス
 今其商況外國注文ノ一斑ヲ知ランガ爲メニ明治三十七年一月頃ノ
 狀況ヲ掲テ其繁盛ヲ推サントス即チ

當時橫濱英八十六番ヨリ竹籠菓子入ノ注文二百三十八萬四千個ヲ千葉縣下印幡
 郡酒井町ナル高須賀竹器製造所ニ注文シタリト云フ然ルニ當製造所ニハ職工三
 十人持出職人百人アルノミニシテ到底之ガ注文ニ應ズル能ハズ僅カニ八分ノ一

乃チ二十八萬八千個ヲ引受ケタリト

斯ノ如ク近時竹籠ノ需要著大ナルモ未ダ内地供給ノ之ニ應ズル能ハザル現況ナリ利益ヲ空シク失フモノト云フベシ尙ホ本邦竹籠ノ名産地ハ攝津國有馬地方ニシテ有馬籠ノ名著シ又盛進株式會社ハ竹籠輸出ニ多大ノ産額ヲ出セリ將來外人ノ嗜好ヲ變ゼシメズ又信用ヲ損スルコトナクンバ益々需要増大スルヲ見ルベシ此時ニ當リテ供給ノ之ニ應ズルヲ計ルハ國家經濟上又必要ノコトトス

第三節 竹簾ノ貿易狀況

竹簾ハ本邦内地之ガ需用又甚ダ廣シ近時又貿易用竹簾ノ輸出額次第ニ増加シ三十七年頃毎月五千圓以上壹萬圓内外ノ輸出額ニ上リ又最近三十八年一月ノ如キ殆ド貳萬圓弱ニ達シタリトス元來竹ハ分割性ニ富ムモノニシテ其性最小トナリ然カモ強靱更ニ

之ヲ組ミ合シテ日本國有ノ繪畫ヲ施シ以テ益々外人ノ嗜好ニ適セシム其高尚ナルハ皮付ノモノヲ用ウレドモ廉直ナルハ肉質部ノ纖弱ナルモノヲ使用セリ竹簾ノ輸出モ亦神戸市ヲ中心トス其製造所ノ著大ナルハ和泉國岸和田濱町ナル泉南組ニシテ神戸市ニ出張所ヲ設ケリ尙神戸市北長狹通三丁目ナル井上氏モ之ガ輸出品製作ニ盡ス所大ナルモノナリトス

(備考) 竹製品ノ輸出ニ關スル狀況ノ詳細ハ農商務省商工局編纂ノ第四次輸出

重要品要覽ニ明載セリ

今其三十六年編纂ノ竹製品記事ノ大要ヲ畧記シテ補フ所アラントス

(第一)輸出額 三十一年ヨリ三十五年迄ヲ示ス而シテ三十一年ヨリ三十四年迄ハ竹籠ハ別ニ著シカラザリシ故他ノ竹製品ト

區別ナカリシ竹籠、竹廉他ノ竹製品ノ合計價額ヲ以テ其一般ヲ知ラントス

(年次)	(價額)
三十一年	三四六、九三七 ^円
三十二年	四一七、四〇四
三十三年	六〇五、一七一
三十四年	五三六、五二五
三十五年	四三三、〇六一

(第二)輸出先乃チ需要國ヲ竹利用品ノ多少ニヨリ順舉セバ次ノ如

(1) 竹簾ハ

濠太利、北米合衆國、香港、英吉利ヨリ其他ニ及ブ然シテ尤モ前二

ケ國ヲ主トス其合計年額ハ	一〇二、七三四 ^円
三十四年度	

三十三年度

一九五、三九八

(2) 他ノ竹製品ハ

英、米、濠、香港、支那、佛國其他トス同ジク年額

三十四年度	四三三、七九一 ^円
三十三年度	四〇九、七七三
三十四年度	五三六、五二五
三十五年度	六〇五、一七一
總計	

(第三)輸出港別ハ 神戸ヲ以テ竹簾ノ主要供給地トナシ他ハ少ナ

シ然レドモ竹製品ト竹籠ニ於テハ横濱ヲ以テ尙ホ神戸以上ノ産出額アリトス

(第四)主要ノ産地

兵庫縣ヲ第一トシ其産額五拾萬圓ニ上ラントシ次デ大分縣ニテ拾萬圓其ヨリ順次列舉セバ静岡、愛媛、香川、滋賀、奈良、京都、富山ノ諸縣ヲ以テ著名ナリトス

結 論

如上記スルガ如ク本邦産竹類ノ需要消費ハ一方内國用ニシテ他方外國向ノモノナリ然シテ之等消費使用ノ状態我ハ實用的ニシテ彼ハ裝飾的ナルヲ以テ主ナリトス且ツ其利用法ノ粗放ナルト周到緻密ナルトニヨリ自ラ價值ヲ異ニシ又之ガ爲メニ家ヲ富マシ糊口ヲ凌グノ徒其數舉ゲテ數フ可ラザルナリ若シ前記本邦内地竹類需要ノ概數元價七百拾六萬圓餘ニシテ大差果シテ無シトセバ竹類ノ我國ニ必要ニシテ又國家ニ利益ヲ與ヘ宛アルコト瞭察スルニ足ルベシ斯ノ如クニシテ竹ノ需要日ニ月ニ増進シツ、アルコト著名ノ事實ナリ何トナレバ我國人口繁殖ノ過大ナルト人文發達ノ極リナキコトハ竹林産物利用ノ途進ミ消費ノ量ヲ増スコト明ナリ茲ニ於テ之ガ經濟的必要上供給ノ件ハザル可ラザルコト喋々辨明スルノ要

ナシ果シテ然ラバ現今我國ニ於テ山城地方ノ竹林培養ノ發達ノミニテ將來内外ノ供給ヲ全フシ得ラレザルコトヲ知ルベシ或地方ノ如キハ今日已ニ供給不足ヲ生シ困難セル所アリト云フ又内地竹材ノ利用ノ著シク進歩シタル爲メ海外輸出ノ竹材ヲ供給スルニ不引合トナル姿アリ今ヤ獨逸ノ如キハ木材ヲ以テ模造竹ノ器具ヲ製スルノ時代トナリ歐米諸大陸ニ輸出ヲ試ミ漸ク竹ノ占領區域ヲ胃カサントス然リト雖ドモ更ニ我國産竹材ノ供給ヲ充分豊富トシ内地用ト海外向トニ餘裕アル蓄積ヲ備ヘバ價格ヲ減少シ今日ノ半バトナルモ需要ノ數量ニヨリ之ヲ快復スルヲ得ベシ此時ニ當リ竹林業者ハ特ニ經濟的ニ竹林業ヲ施行セザル可ラズ加之我國今後五十年間ノ木材不足ハ大ニ其補充ヲ竹林界ニ待タザル可ラズ豈獨リ海外ノ需要ニノミ歸センヤ

斯ノ如クニシテ我國竹林業ノ發達進步ヲ計ルハ焦眉ノ急務ナリ然
 カモ經濟的ニ能ク其計畫ヲ施スニアリ何トナレバ竹林經營及ビ竹
 林生産ノ盛衰如何ハ小ニシテハ私人經濟上ノ收利ヲ左右シ大ニシ
 テハ國家及ビ國民經濟上ノ消長ニ關スルコト至大ナリ故ニ竹林業
 ノ經濟的性質ヲ明カニシ一ニ積極的培養ノ改良造林ヲ促シ二ニ消
 極的保護ノ完全ヲ計リテ需要供給ノ平衡ヲ保タシムルヲ要ス
 然リト雖ドモ之ガ實現ノ當ニ竹林ノ所有者又ハ個人經營者ニノミ
 依頼スベキニアラズ行政特ニ林政上竹林經營策ノ方針ヲ採リ國本
 培養ノ一助トモナスベキナリ殊ニ我國ニ於テハ竹林ヲ經營シ得ラ
 ル、ノ地積甚ダ廣ク南臺灣ヨリ北宮城縣ニ及ビ尙ホ保護國タル朝
 鮮ノ南部ニ於テモ適應スル所少カラズト謂ウ然シテ愈々今後竹林
 ニヨリ國利民福ヲ増シ國家ノ富源ヲ開キ世界ノ富林國然カモ竹林

國タル名聲ヲ揚ゲ世界的日本ノ一物トシテ竹林產物利用ヲ發達セ
 シメバ我國林業界并ニ工業界ノ光明ヲ發輝スルモノト云フ可シ、

日本竹林經濟論

(終)

日本竹林經濟論附錄

附 錄

第壹 日本内地産竹種類及び其効用

我國産林業植物にして禾本科に屬するは竹類のみ而して更に之を四屬に別ち其變種を加ふれば日本内地のみにて五十種を下らず又或種の竹は特に或地方に限り生育し其性狀を保持するものありとす効用としては著しきものを掲ぐべし

(一) 苦竹屬 花房大形の苞により殆んど包被せられ三雄蕊を有す

(1) まだけ、苦竹、眞竹、本竹

効用 竹類中最も上等にして利用廣く効用の大なるものなり、古來我建築用として椽、泉笕、承霽、竹縁、屋根板及び壁の下地とし桶類の箍として最も適し之を分割せるものは簾、扇子骨

傘骨、箴、尺度又は籠に編み竹細に適し一般竹を使用するもの
 枚舉に違あらず又竹繩となし甚だ強緊なり、筍も亦食用に供
 せられ籜は竹類中最も使用上貴重にして包物に用ふること
 限なし、特に關西地方四國地方にて籜草履を作る殊に苦竹の
 一變種たる白竹の籜は筑後尾張を名産とし下駄草履表とな
 し白色美麗にして賞用せらるる故に籜の價普通の數倍にて籜
 を目的として造林するの價ありとす、尙細割せる部分は近年
 電燈の炭素線に用ひ効大なり、

變種 (ア) 金明竹(金竹) 竹幹黄色を呈し綠色の條相互に通ず
 るを以て美觀なり庭園に植え賞觀すべし

(イ) 實竹 (又は實心竹) 根際に近き部分は中實にして賢密印
 材又は杖となし貴ばるゝも近來臺灣の實竹(刺竹)多く輸入

せられ従て内地産實竹の價値を減ぜり、

(ウ) ほてい竹(布袋竹) 人面竹、琉球竹等 其形狀奇にして根際よ
 り節間波狀をなし庭園に植へ賞觀するに足り又材は杖、傘
 の柄に用ひ全幹は釣竿として貴し

(エ) しらたけ(皮白竹) 籜を賞美す前に記するが如し

(2) はちく(淡竹) 又はあはたけ、からたけ、あはたけ、

質堅く細割し易きを以て古來籠細工、籃、簾、箔及び提灯の骨と
 なし又丸材は杖、傘柄及び釣竿等となす又静岡の名産灰吹は
 吐月峯より産する淡竹にして且つ編物製品に用ひらる、苦竹
 に次で効用大なり、

變種 (ア) くるちく(黒竹) 又は烏竹 小なるものは箴、傘、提灯の
 柄となし又机案、書架等美術的竹器として室内裝飾に賞用

せられ其他釣竿として近年輸出大なり着色の深黒なるもの最も價貴し、

(イ)ごま竹(胡摩竹) 竹製茶器其他床柱家具裝飾品に用ふ、

(ウ)うんもん竹(雲紋竹、斑竹) 竹幹に種々の斑紋を生じ美觀なり、然れども産地により斑紋一定せず故に珍奇なる器物茶道具、文房具、扇子の骨となし又小なるものは筆管、煙管、杖、額縁、床柱等に用ふ

(3)もうそう竹(孟宗竹、江南竹) 主として筍採收の爲めに栽培せらる然れども竹幹他の竹類に比し著しく肥大厚肉なるを以て特主の効用あり即ち花瓶、筆筒、盆飯、櫃、辨當箱、柄杓等となし殊に薩摩名産なり、近年大垣地方にてカキ、ユウカン入になし需要廣し、分割し易きも質粗弱なるを以て一時的安價の籠に

編む筍籠、魚籠等の如し、尙ほ庭園風致の爲め植栽するも景色を増し常に深綠色を呈す、

變種 (ア)龜甲竹(又は龜絞竹) 根際數尺の間節間短く且つ斜に龜甲狀の紋刻を呈し庭園に植へ賞觀せられ或は盆栽となすべし又此筍は最も美味ありと

(イ)佛面竹 前者に類似せるもの、小きものは杖、傘柄などに用ふべし、

(4)ごまい笹(おかめざさ)又は豊後笹 苦竹屬中最小にして節より五葉を生ず竹幹は其儘編みて釣花生、炭籠其他のものに賞す、

(二)矢竹屬 花房は苞を有せず雄蕊三個あり、

(2)やだけ(矢竹、箭竹、篠竹) 古來我が弓矢の時代には箭に用ひら

れ廣く愛賞せられたるも近時漸く需要少なし、然れども尙釣竿、團扇用又は筆管其他に用ひ且つ其枝葉美觀を呈し庭園の風致を加ふるに適す、

(2) めだけ(女竹、含竹、なよ竹) 苦竹、淡竹、孟宗竹に次ぎ利用最も廣し然れども虫害に罹り易く質軟弱にて保存期短し専ら團扇の骨柄となし又編細工に用ひ炭斗屑紙籠等を作り尙ほ近年苦竹の高價なる爲め建築上壁骨として東京横濱大阪地方の大ならざる家屋に使用せらるゝこと大なり、又筆管、煙管は大抵此竹を用ふ

變種 (ア) はこねだけ(箱根竹) 効用女竹に同じ

(イ) つうし竹 庭園用に植栽す、

(ウ) しまめだけ 庭園用として其葉美なり

(3) ねざゝ 原野丘陵に野生し材地を妨害す、

變種 (ア) ちござゝ (しまざゝ) 葉に白色の縞あり高く低く盆栽用及び庭園の風致に植栽すべし

(イ) かむろざゝ 新葉黄色を呈し美なる庭園用又は盆栽用とす

(ウ) すだれよし、専ら簾を編む野生のものを利用す、

(エ) おろしまちく(きりんちく) 幹細小葉短小にして綠色なれば庭園又は盆栽用として賞観す、

(4) がんざんちく(簞篠唐竹) 庭園用、

變種 たいみんちく(大明竹) 庭園用となし材は笛に用ふ、

(5) 業平竹(支那の福州竹) 庭園用として賞観す歴史的に其名高し効用前者に同じ

- (6) たらちく 庭園用
 - (7) 四方竹(方竹) 幹 形状多少四錘稜方にして奇形なり故に賞観用とす材は軟質なれども杖又は特種の裝飾に用ふ
 - (8) かんちく(寒竹、紫竹) 庭園用及び垣根に適す材幹紫色を呈すれども乾燥せば白色となり優逸のものとなる我建築上往々裝飾の場所に用ひられ其他黒竹の小物に同じ
- 變種 ちごかん竹 葉に一種の白縞ある庭園用
- (三) 隈笹屬 柱頭常に裂け根莖節間長く且つ水平雄蕊六個を有す
- (1) くまさゝ(隈笹、箸竹) 葉大にして東京地方すし屋にて用ふ又ちまきに用ふ葉邊凍霜にて白色化し却て美なり庭園用に供す林地にありては妨害をなす
 - (2) ねまがりざゝ 東北地方森林地の害をなす根際屈曲して生

- ず寒地の野生にして之に類し竹幹に斑紋あるものは當用せられ且つ筆管煙管杖等として貴重せらる沙古丹竹床鍋斑竹支那斑竹等之なり
- (3) すゝ竹(若竹、やまだけ) 野生山野に多し材は割て編細工となし籠籃行李文匣花籃手抱カバン及び近來帽子敷物等となす長野縣は此名産地なり又此竹は佳實を結び食用に供し饑饉年の救荒備品となす効あり
 - (4) みやこざゝ 高山に野生す効なし
 - (5) あづまさゝ 高山に野生す効なし
 - (6) あけぼの笹 新葉五六月に生じ美なり庭園に植へ最も賞観すべし盆栽用として可なり
 - (7) 翁笹 竹幹寒竹に似て葉に白縞あり盆栽及庭園用

(四)鳳凰竹屬 根莖の節間短く且つ上下に走る雄蕊六個、

(1)鳳尾竹(土用竹)又は株竹、叢生竹、金竹等の名あり)

材幹平滑細長葉妙なり、庭園風致用なり又材は傘柄杖等に供し美麗なり、土佐産名高し、乾かせば白色となり平滑なり)

變種 すわう竹 林幹美麗庭園の風致に適す、此籜は紅色を帯ぶ盆栽とするも可なり、

(2)だいこんちく(孝行竹) 竹幹叢生す、葉麗はしく庭園用に可なり

(3)鳳翔竹 竹の葉に斑紋を生ず庭園用、

第貳 臺灣の竹類及び臺灣人竹材利用

臺灣は竹の中心にして其成長と繁殖の著しき之れ氣候上の于係に歸すべし、之が爲めに臺灣人從來竹を利用する事又内地に劣らず經

濟的文化の未だ開けざるに於ては、竹の利用消費自ら多大にして實用的必需品とす、恩師本多林學博士其著書に記して之を証せらるる左に之を掲げん、

「臺灣の如きは竹の柱に竹の屋根竹の寢臺に竹の壁椅子も机も桶も杓子も殆ど皆竹のみなり陸を行くにも竹輿に乗り海を行くにも竹筏を用ひ日常飯を焚くにも竹を燃やし酒を買ふにも竹筒を用ふ實に竹無ければ一日も生活する能はざるものゝ如し」と

かくて内地人と雖ども一度臺灣に渡り彼土人の竹を使用する事の廣きに驚かざる者なしと云ふ、尙ほ其著しき利用の方面を列舉せば次の如し、

(一)竹紙製造の原料に供用すること

- (二) 筏を編みて貨物輸漕の用に供すること、
- (三) 家屋倉庫其他の棟梁に代用すること、
- (四) 家屋倉庫其他の屋根瓦に代用すること、
- (五) 椅子、寢臺、戸棚等の如き材料に使用すること、
- 之れ本年(三十九年初春)臺灣の大地震に遭遇するや其被害甚しく人屋倉庫破倒し之が再建の必要に際し竹材從來の三倍に騰貴したりと告ぐるも竹無くして彼土人の日常生活を過す能はずと謂ふに徴して明かならん、
- 次に臺灣の竹類に就き先に總督府民政局殖産課員の調査する所のものあり然れど未だ植物學上の分類所屬明かならざれば茲に其名稱及び特主の効用を列舉せん
- (1) 荊竹(土人の語ケーテーク)諸般の器物椽棟の材料及び印材等に

- 用ふ、又防衛防風の用に供し、牆籬に適す、利用内地の苦竹に近し
- (2) 桂竹(クイテーク)竹細工筥等に用ひ、又製紙原料となし用途廣し、前者と共に筍を食用す、
- (3) 長枝竹(トンヰテーク)及効脚綠竹(ハウオーレンクテーク)
- (4) 猫兒竹(ラウジテーク)筍を賞用す、
- (5) 觀音竹(クワンノイムテーク)筍を作る
- (6) 綠竹(リヨクテーク)材幹用に堪へず筍を食用す、
- (7) 蘆竹(モリアテーク)筍を食用す
- (8) 石竹(チョーテーク)我内地の布袋竹なり、土人は煙管、杖、筍等に用ふ、
- (9) 有銜竹(バーハムテーク)筍(筍)を作るに適す、
- (10) 箭竹 弓箭を作る

(11) 淡竹 根幹共に日干して煎薬とし驅熱の効ありと云ふ、

(12) 紅竹 葉莖を剪み豚肉と併せ食すれば吐血病に効ありと云ふ

(13) 蘆竹 鴉片の烟斗脚に用ふ、

かくて臺灣は我國竹類の中心とし又郷土として最も適應なりとす然れば將來に於て益々其自然の恩惠物たる竹類中最も經濟的に利用廣く効力大なるものを撰び之れに合理的林業を施し竹林の整理改善を加へ進んで外國輸出用竹材を産出せしむるは臺灣殖産上必須の事なりと信ず著者未だ臺灣に踏査する所なきを以て詳かに其立論を成し能はずと雖も今後大に彼地竹林業上の面目を新にし開發利用の道を講ずるは我國竹林經濟上識者の忽緒に附す可からざる事なるべし、

第參 日本竹製品類集

凡ソ竹製品ハ其原料多キ竹林國ノ製産物ニ歸因スレドモ特ニ著名ニシテ其名海外ニ轟ケル者ハ吾國ノ右ニ出ヅルモノナク常ニ吾邦人が竹ヲ利用スル事ノ多大ニシテ且ツ巧妙ナル事ハ歐米人ヲシテ後ニ膛若タラシメル所ナリトス而シテ曩キニ獨逸人はんすすばり―氏ハ之レガ研究ノ興味ヲ抱キ多年辛苦ノ末吾邦竹ノ利用法ヲ探リ之ノ製作物ヲ類集セラレ之レガ用途ニ至ル迄説明ヲ附シ以テ本國(獨逸)語ニ依リ之ヲ歐州ニ紹介セラレ其集ムル所千數百種ニ及ブ然リト雖モ同種類ノモノニシテ形ヲ殊ニスルモノ亦少カラズ依テ余ハ其實用上竹製品ノ異種類ヲ撰ビ併セテ氏ノ類集セル所ヲ日本名ニ譯載シ吾國人ニシテ猶氣附カザルモノ、參考ニ供セントス

(一) 家具ト子供ノ遊道具

見臺 腰掛 茶筥子 小筥子 衝立 風呂さき 手拭掛 衣紋
掛 掛物掛 竹釘 枕 覆盆 針指 鉤 糸入 糸卷 針 鏡
立 鏡掛 埃拂はたき 孫ノ手 蠅叩 鼠取 手燭 燭臺 心
取り 額 簾 柱隠し 簾掛物 紙寫 竹馬

(二) 神道及佛教ノ祭典用

笏 ずし 香爐 香具筒 線香筒 賽錢筒 御簾 香箱 佛ノ
花活 御神酒ノ口 神はち 御神酒樽 筒守り

(三) 花生 花籠

植木臺 花生臺 二岐花生 掛花生 掛花生簾 夜長花生 う
すばた花生 花手桶 筒花生 立花生 鉤花生 餌籠 花籠
籠花生 花盆 提げ花籠 植木鉢 植木籠 竹ノ造花 島臺

(四) 鳥籠ト虫籠

鳥籠 鶉籠 虫籠

(五) 服裝及附屬器

庭下駄 駒下駄 復草履 竹皮草履 駒下駄表 標 竹ノ子笠

僧侶笠 網代笠 汗取り 禪 團扇 袂落し 着物袂 簞箱
中差 筭 卷繪櫛 梳櫛 眉刷毛 紅筆 瓜銷子 刷毛 孫ノ
手 馬笠 奴 蛇ノ目傘 日傘 翁ノ枝 鞭 打球匙 蠅追
軍扇 金日ノ丸扇 鐵扇 僧侶扇 白扇 扇 團扇挿 舞扇

(六) 提灯

盆提灯 箱提灯 弓張提灯 馬乘提灯 小田原提灯 蠟燭入
振提灯 細提灯 僧侶提灯 庭燈籠 簾燈籠

(七) 書道具及標具

竹ノ紙 矢立 大工用矢立 八百屋矢立 墨壺 竹硯 硯臺
硯屏 硯箱 墨臺 筆立 筆箱 筆 條引 墨挿 墨挾 ふん
廻 手紙箱 綻箱 文箱 文庫 狀文庫 狀挿 帳面文庫 洞
藍 短冊箱 紙挾 紙切 日記 字衝 技折 印版 印 肉入
ばれん又たんぼ 繪畫引尺 鯨尺 釵 二尺尺 足袋尺

(八) 食器ト飲料器及菓子器

飯籠 食籠 辨當 提辨當 仕込筭子 手提辨當 仕込辨當
廣蓋 網代膳 網代椀 會席膳 吸物膳 蒸籠 盛籠 龜子笊
盛上笊 酢箱 菓子入 菓子器 菓子鉢 菓子皿 菓子平鉢
菓子手提鉢 菓子盆 菓子簾 吸物椀 竹井 盃 菓子籠 水

先 なつめ 茶入 茶筒 茶函 茶匙 せんばい 茶焙 茶扇
茶瀝 提なつめ 提茶筒 振出線香入 茶撰 比杓 茶杓 土
壘 吸子 湯吞箱 茶碗 湯吞 蓋置 茶籠 湯吞入 茶碗入
茶托 茶臺 竹ノ節茶臺 茶盆 建水 花目札

(九) 酒器

樽 柳樽 酒樽 酒筒 吸筒 瓢箪 提重 仕込 德利 德利
ノ口 銚子 猪口 酒吞蓋 盃 德利袴 盃洗

(十) 食器及菓子器

箸 割箸 烏箸 菜箸 箸箱 箸置 箸立 薬味入 小楊子入
小楊子籠 杓子ノ匙 鰻串 箕 金申入 大根卸 せんぶんす
き 大根干 編笊 熊手 檜杓 蒸籠 龜子笊 篩 箸蓋 櫃
臺 團扇 生麥洗 鯨筆帚 自在鍵 杓子柱

(十一) 喫烟道具

煙草盆 籠煙草盆 灰吹 煙管置 煙草壺 巾着 袖煙草壺
筒さし又ハ煙草入 さし 竹のとんころ 煙管 煙管入 提煙
草盆

(十二) 根付及印籠

印籠 根附 箱根附 木魚根附 船の根附 腰さし 蛇の根附
巾着 餌壺 虫取籠 提物

(十三) 小飾物及置物

置物 碁及碁石 算木 面 按摩ばくち 骰子壺 骰子匣

(十四) 樂器及謔音器

一絃琴 三絃琴 三味線或ハ 竹琴 胡弓 胡弓掛 三味線用
駒 笙又ハ舞樂笛 箏 尺八 横笛又笈笛 風鈴 按摩笛

ガラガラ 三味線箱

(十五) 籠ト編細工

笊 静岡竹編物 張文庫 漁師箱 錢籠 水口行李 炭取 遊
團扇 塵取 埃取リ又馬糞取 子供蔦籠 墨籠 魚籠 提籠
手付籠 魚贈籠 提籠 仕込提籠 小供魚贈籠 茶篩 茶振
茶摘籠 手提 仕込籠 提提籠 果實蔬菜入荒目籠 手提籠
大目提籠 日籠 一斗笊 二斗笊 欵振リ 簾 掛簾 乗物簾
松竹梅

(十六) 道具及器械

(農業用) 熊手 じよれん 石搔 金熊手 萬能 鎌 草扱 鳴
子 野團扇 竹漏斗 高筭 車
(漁業用) 洞 軒 魚籃 蓋網魚籃 差留 釣竿 筍 綱すき針
綱ノこま 糸卷 鰻かま 薬味樽
(手工) 框 糸卷 眞綿取 綿紡き 箴 木綿振子 振子 荷造
針 米さし 筥 糊筥 粕取り 印留 齧箱 竹針 刷毛
墨針 墨掛 轆轤錐 繪具磨 大工小道具 馬櫛 馬筥 秤
小手 油壺 錢筒 水擔 乃簾掛 幟 梯子 塔 天井 袖
垣 簾 棒かぎ又水籠 すわく 淺草紙 半紙又雁皮紙

(十七) 武器及戰爭道具

竹刀 竹洞 大弓 矢 半弓 胡籬 弓掛 短刀 翁ノ刀 小
束 鎖鎌 兵隊陣笠 刀掛 短刀掛 火繩 火籌 指物 旗馬
印

33
538

明治參拾九年九月一日印刷
明治參拾九年九月一日發行

竹林經濟論與附

定價金四拾五錢

安藤時雄

東京市本郷區春木町二丁目廿一番地
森江英二

京都市上京區寺町通貳條南入十三番戶
河合卯之助

不許複製

發賣所

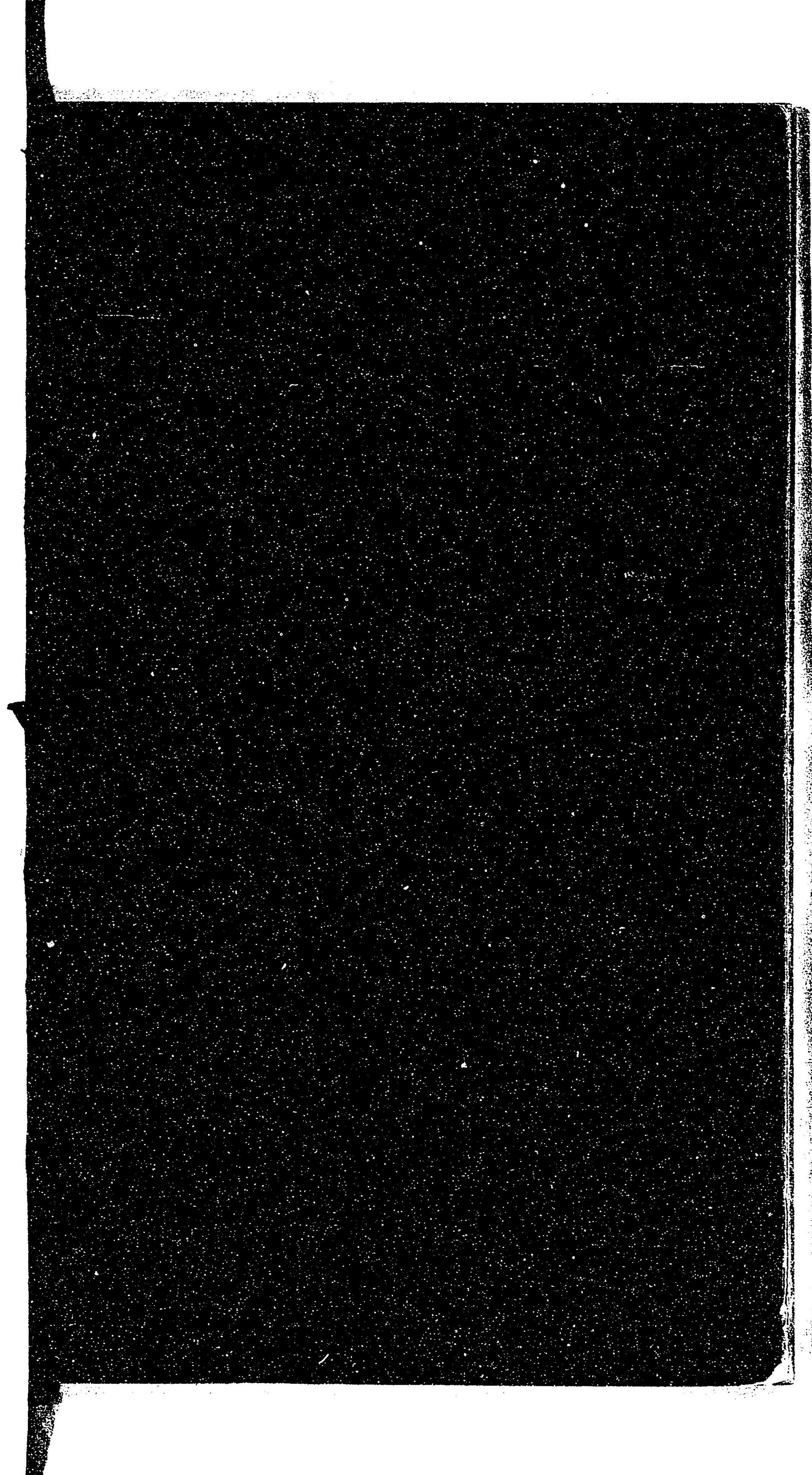
印刷者兼

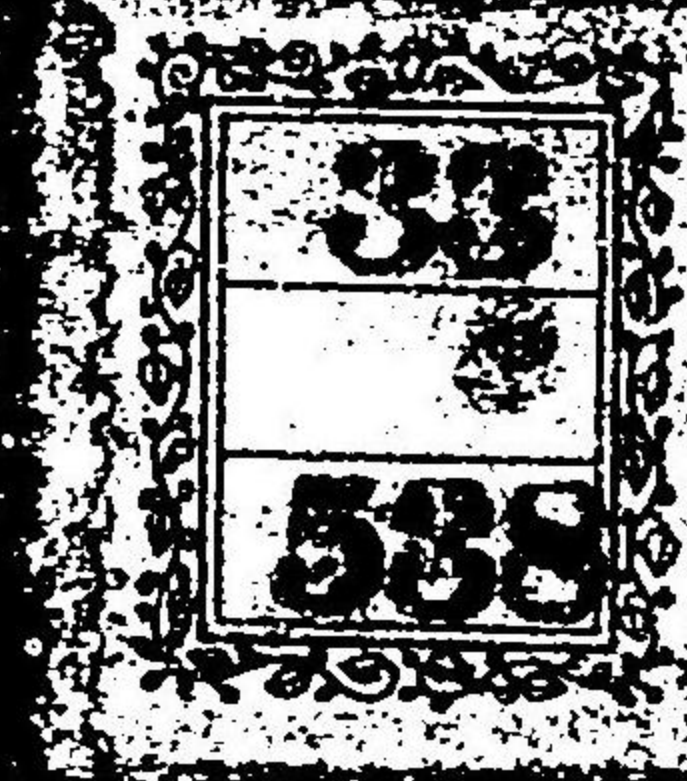
發行者

著作者

東京市神田區表神保町區
東京市京橋區銀座四丁目區
名古屋本目町
大阪市東區心齋橋筋博愛町角

東京堂
東海堂
川瀨代助
青木嵩山堂





042736-000-3

33-538

日本竹林經濟論

安藤 時雄/著

M39

BDJ-0398

